

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(13)

一般地方道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平 松 城 跡

1995年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、一般地方道飯野～松山～都城線の改良工事に伴い鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した平松城跡の緊急発掘調査の記録です。

本遺跡は曾於郡末吉町にある縄文時代から中世までの遺跡で、各時代を通じて遺構・遺物が発見されました。特に、平松城に伴う土塁や堀が新たに確認されたことは意義あることです。

本書が多くの人々に活用され、教育・文化研究の一端を担い、また県民の皆様方の埋蔵文化財に対する理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりますが、この発掘調査に御協力をいただいた県土木部の関係者・末吉町教育委員会および地元の皆様に心より感謝の意を表します。

平成7年3月

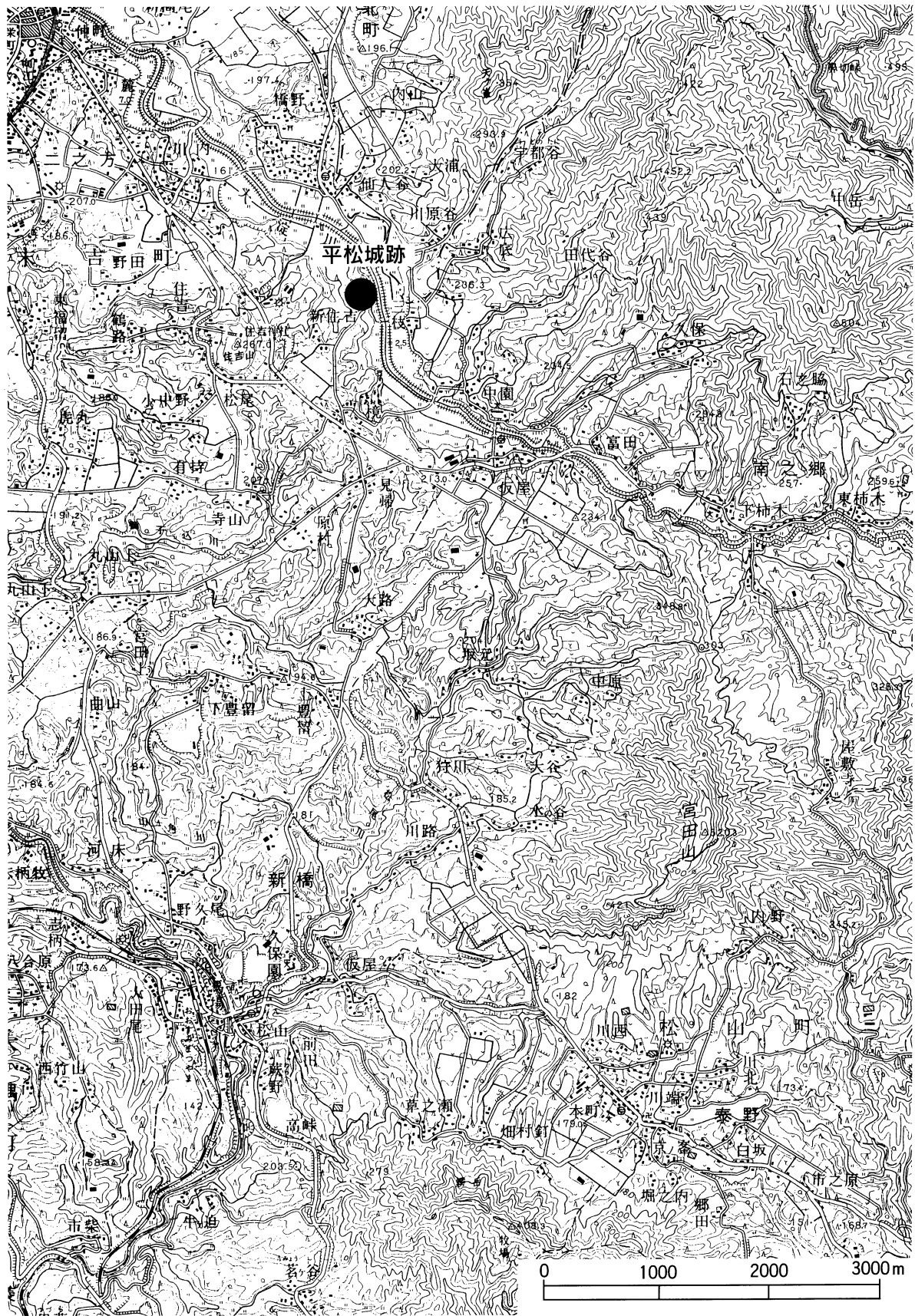
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 内村正弘

報告書抄録

ふりがな	ひらまつしょうあと
書名	平松城跡
副書名	一般地方道飯野～松山～都城線建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	弥栄久志・倉元良文
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL 0995-65-8787
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらまつしょうあと 平松城跡	かごしまけんそおくん 鹿児島県曽於郡 すえよしちょうみなみのごうじんのやま 末吉町南之郷陣ノ山	464643	66-61	31°38′	131°30′	19930928～ 19931130	3000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平松城跡	山城	中世 平安 古墳 弥生 縄文	土塁・堀 集石1基	土師器 成川式土器 弥生前期 縄文晩期(刻目突帯文土器) (黒川式) 縄文後期(三万田式) 縄文早期(前平式・吉田式・石坂式)	



第1図 遺跡位置図

例 言

- 1 この報告書は、一般地方道建設に伴う平松城跡の発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
 - 3 平松城跡に関する指導・助言は、鹿児島短期大学長の三木靖氏に依頼した。
 - 4 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する
 - 5 発掘調査における測量・実測・写真撮影は弥栄・倉元が行った。
 - 6 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章・第Ⅵ章	倉元
第Ⅱ章	弥栄
 - 7 遺物写真撮影は、鶴田静彦が行った。
 - 8 報告書の編集は、倉元が行った。
-

本文目次

序文

報告書抄録

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 環境	4
第3節 周辺の遺跡	4
第Ⅲ章 層序	7
第Ⅳ章 平松城跡の調査	11
第1節 平松城の概要	11
第2節 調査の概要	11
第3節 遺構	12
第Ⅴ章 発掘調査	15
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構	15
第3節 遺物	20
第Ⅵ章 まとめ	30

図版

表目次

第1表 周辺遺跡地名表	6
第2表 土器観察表(1)	27
第3表 土器観察表(2)	28

挿図目次

第1図	平松城跡の位置	
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡	5
第3図	標準土層図	7
第4図	土層断面図	8
第5図	平松城跡工事着工前の地形図	9
第6図	グリット配置図および工事施工後の地形図	10
第7図	IV層上面地形図	12
第8図	遺構配置図及び見取り図	13
第9図	堀断面図	14
第10図	トレンチ配置図及びIV層遺物出土状況	16
第11図	V層遺物出土状況	17
第12図	IX～XI層遺物出土状況	18
第13図	XII層上面地形図	19
第14図	集石	20
第15図	出土土器(1)	21
第16図	出土土器(2)	22
第17図	出土土器(3)	24
第18図	出土土器(4)	25
第19図	出土土器(5)	26
第20図	出土石器	29

図版目次

図版1	遺跡遠景, 遺跡近景, 作業風景	32
図版2	堀断面	33
図版3	集石検出状況	34
図版4	遺物出土状況	35
図版5	遺物出土状況, 土層断面	36
図版6	出土遺物(1)	37
図版7	出土遺物(2)	38
図版8	出土遺物(3)	39
図版9	出土遺物(4)	40

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部(大隅土木事務所)は、曾於郡末吉町大路地内において一般地方道飯野～松山～都城線の改良工事を計画し、平成2年11月に工事計画区間内における埋蔵文化財の有無について末吉町教育委員会に照会した。これを受けて末吉町教育委員会は遺跡地図等の照合を行った結果、平松城跡の範囲に含まれないと判断し回答した。

ところが、工事に着工後の平成4年に民間から工事区内の断面に遺構があると通報があり、末吉町教育委員会は鹿児島県教育庁文化課(以下、文化課)に連絡の上、平成5年1月に鹿児島短期大学の三木靖先生に調査を依頼した。その結果、平松城跡は、これまでの区域より拡大することが判明し不時発見の遺構も山城関連の遺構であることが確認された。これを受けて平成5年4月に文化課・県土木部・末吉町教育委員会で今後の取り扱いについて協議が持たれ、鹿児島県教育委員会が調査主体となり、県立埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

第2節 調査の組織

発掘調査

■事業主体	鹿児島県土木部		
■調査主体	鹿児島県教育委員会		
■企画	鹿児島県教育庁文化課		
■調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保忠昭
		次長兼総務課長	水口 俊雄
		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
■調査担当者		文化財主事	弥栄 久志
			倉元 良文
■調査事務担当者		主査	成尾 雅明
		主事	中村 和代

報告書作成

■報告書作成事業主体	鹿児島県教育委員会		
■企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
■報告書作成事業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村 正弘
■報告書作成事業企画者		次長兼総務課長	川原 信義
		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
■報告書作成担当者		文化財主事	弥栄 久志
			倉元 良文
■事務担当者		主査	成尾 雅明
		主事	中村 和代

第3節 調査の経過

調査は、平成5年9月28日から11月30日まで実施した。以下、調査の経過については、日誌抄をもつてかえる。

9月28日(火) プレハブ設置。

29日(水) 重機による表土剥ぎ。

10月7日(木) 発掘機材等搬入。作業用具点検。作業員へ発掘調査の手順と安全確保の注意。掘り下げ開始。

12日(火) 廃土処理・山城面検出。

13日(水) 廃土処理・山城面検出。

14日(木) 廃土処理・山城面検出。

15日(金) 廃土処理・山城面検出。

18日(月) 廃土処理・山城面検出。

19日(火) 山城面検出・清掃。

20日(水) 山城面検出・清掃。

21日(木) 山城面検出・清掃。

22日(金) 航空写真撮影。

25日(月) 三木靖先生現地指導。

26日(火) 10mグリッド設定。地形図測量。1・2トレンチ設定，掘り下げ。

27日(水) 3トレンチ設定。1～3トレンチ掘り下げ。

28日(木) 1～3トレンチ掘り下げ。7・8トレンチ設定，掘り下げ。

11月1日(月) 6トレンチ設定。6～8トレンチ掘り下げ。

2日(火) 6～8トレンチ掘り下げ。

4日(木) 6～8トレンチ掘り下げ。7・8トレンチ遺物出土(縄文早期)。

F-1・2・3区及びE-1・2区掘り下げ。

5日(金) 7・8トレンチ掘り下げ。F-1・2・3区，E-1・2区，D-1・2区掘り下げ。

8日(月) E-1・2・3区，D-1・2区掘り下げ。8トレンチ遺物出土状況写真撮影。

9日(火) E・D-1・2・3区掘り下げ。D・E・F-1・2・3区遺物出土状況写真撮影，平板実測，取り上げ。4・5トレンチ設定，掘り下げ。

10日(水) 4・5トレンチ掘り下げ。C・D・E-4区掘り下げ。D-6・7区遺物平板実測，取り上げ。

11日(木) D・E-4区掘り下げ，V層遺物出土状況写真撮影，平板実測，取り上げ。B-4，C-4・5・6区掘り下げ。D・E・F-2・3区重機によりⅧ層(青灰色層)まで掘り下げ。

12日(金) C-5・6区掘り下げ。E・D-4区重機によりⅧ層(青灰色)まで掘り下げ。

15日(月) B・C-4・5区掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，平板実測，取り上げ，地形図測量。D・E-4区掘り下げ。

- 16日(火) D・E-4区掘り下げ。E-4区遺物出土状況写真撮影。
- 17日(水) D-3・4区掘り下げ。E-4区遺物出土状況平板実測、取り上げ、地形図測量。
- 18日(木) D-4区遺物出土状況写真撮影、平板実測、取り上げ。D・C-3区掘り下げ。
- 19日(金) D-3・4区、E-2・3区掘り下げ。D-3区遺物出土状況写真撮影、平板実測、取り上げ。
- 22日(月) D-3・4区地形図測量。D-2区、E-2・3区掘り下げ。D-3区東側土層断面実測。
- 24日(水) D-2区掘り下げ、地形図実測。E-2・3区掘り下げ。D-2・3区北側土層断面実測。
- 25日(木) E-2・3区掘り下げ。D-3区東側土層断面実測。D-4北側土層断面実測。
- 26日(金) D-3区東側土層断面写真撮影。D-2区集石写真撮影。E-2・3区、D・E-4区ベルト部分掘り下げ。
- 29日(月) E-2・3区掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、平板実測、取り上げ、地形図測量。D-2区集石実測。堀断面写真撮影。
- 30日(火) 堀断面実測。C・D-4区遺物出土状況平板実測、取り上げ。後片付け、発掘器材撤去。
調査終了。

第II章 遺跡の位置及び環境

第1節 遺跡の位置

遺跡の所在する所は鹿児島県曾於郡末吉町南之郷陣ノ山で、通称「平松城」と呼ばれている。

平松城跡のある末吉町は、鹿児島県でも大隅地方の北部にあたり、宮崎県との県境が北側に見られる。

平松城跡は、末吉町のほぼ中部に位置し、北隣は宮崎県都城市に接する所にある。緯度・経度で示すと、北緯31° 38′，東経131° 30′にあたる。

第2節 環境

末吉町の地形としては西部のシラス台地と、東部の山岳地帯に分けられる。山岳の中には、標高504mの中岳がある。その中岳は都城市から宮崎市に流れる大淀川や、志布志方面に流れる前川や安楽川の分水嶺になっている。

大淀川は、末吉町の西部のシラス台地を浸蝕しながら南東から北西へ流れ、都城で小林市方面や財部方面から流れ込む沖水川や萩原川等と合流し、都城盆地を形成している。

遺跡は、大淀川が形成した標高約200mの舌状台地に立地し、中世の山城(陣跡)の下に縄文・弥生・古代の遺物が出土した。

その山城のある舌状台地は、シラス台地から突き出た所で、接点は大きく括れ、城跡は独立した丘状になっている。

山城跡の南側は平坦な畑地となり、ここは、通称「国合原」と呼ばれ、合戦の記録もある所で、中世では重要な位置であったことが伺える。北側は、標高差約40m水田となっており、城跡から見下ろす形になっている。水田以前は大淀川の氾濫原と思われ、山城の防御(濠)の一部として利用したと考えられる。

第3節 周辺の遺跡

末吉町は現在138ヶ所の遺跡が周知され、その分布状況は市街地のある中部～南部に至る二ノ方地区や南之郷地区に集中している。

その他、北部の諏訪方地区の西側と深川地区の東側に若干見られる。

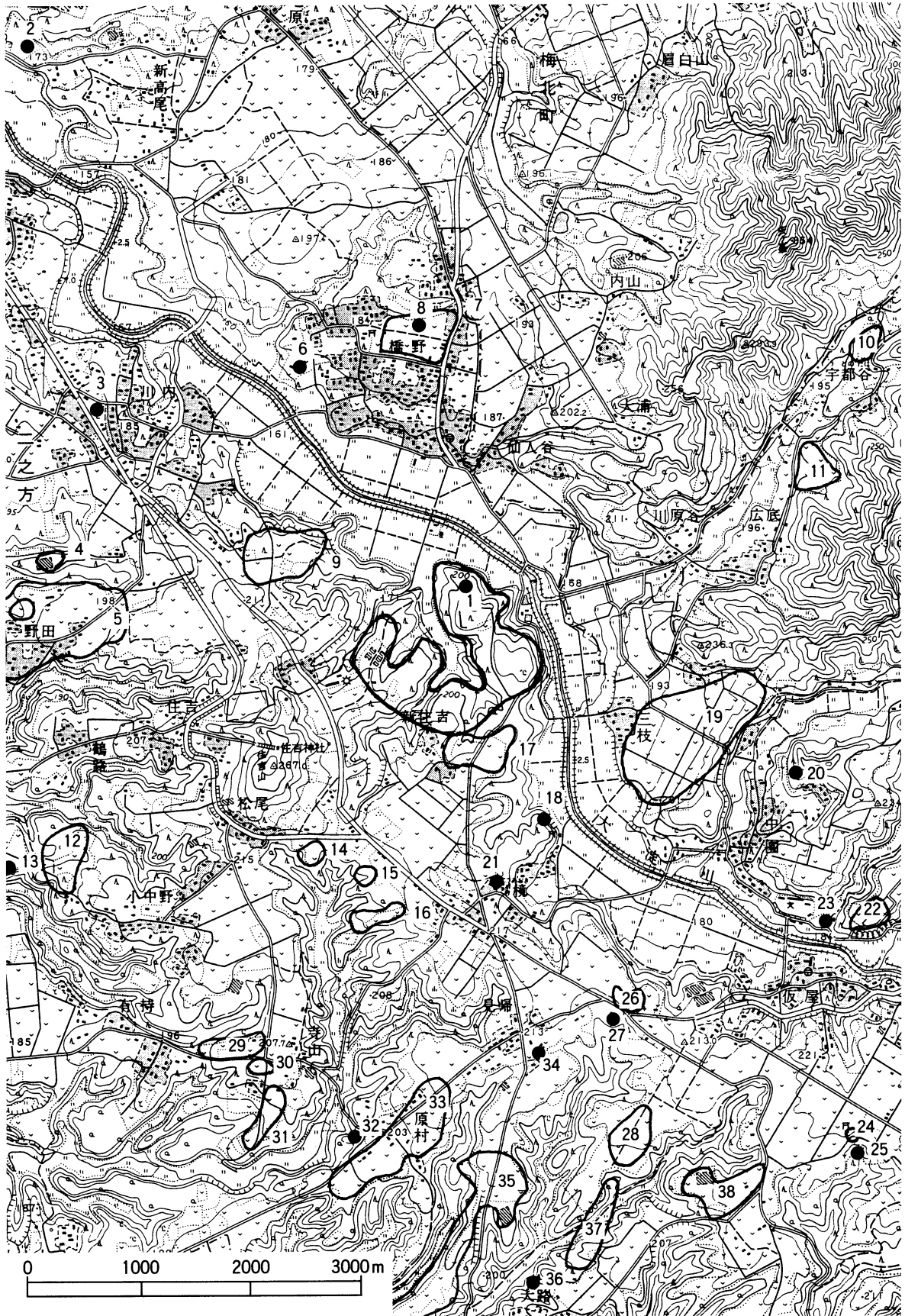
今までの遺跡の主な調査では、旧石器時代から中世まで、各時期の遺跡が報告されている。

旧石器時代は、三枝遺跡、田代谷遺跡が知られている。

縄文時代は主に前期、中期、後期、晩期の各時期の遺跡が調査報告され、前期では1985年に真方入口遺跡で轟式土器が、中期・後期では1980年に中岳洞穴で西平系の土器が、また、1981年には宮之迫遺跡で岩崎式土器が大量に、晩期では1986年に上中段遺跡で山ノ寺式・夜臼式土器を報告している。

また、入佐遺跡の住居跡出土の土器は、晩期前半の「入佐式土器」と称する鹿児島県の標識土器となっている。

第2図は平松城を中心とした周辺の遺跡である。



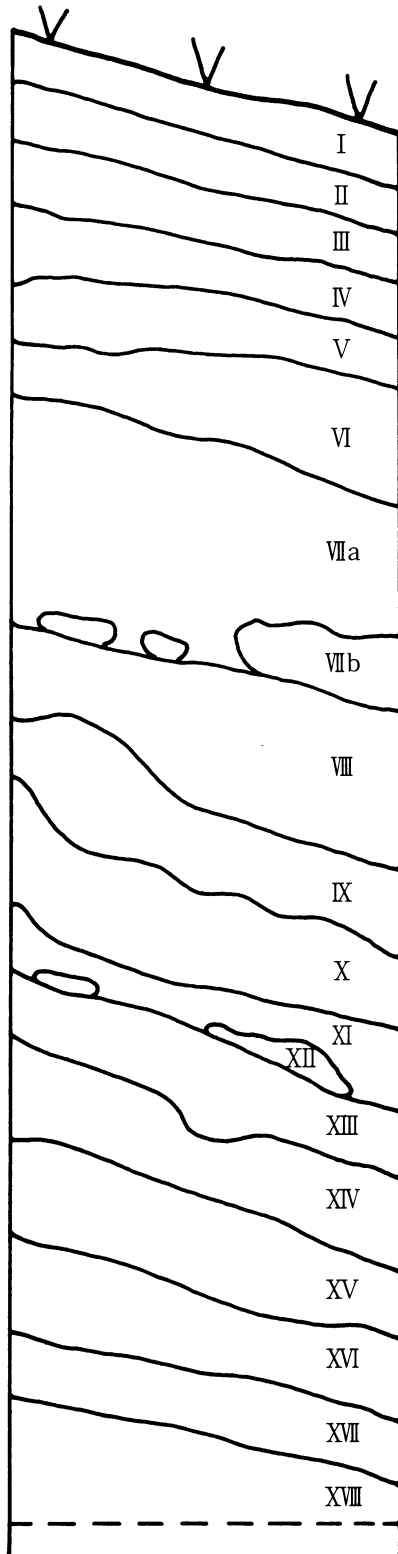
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	地名表番号
1	平松城跡	南之郷陣之山	台地	安土桃山	城跡		66-16
2	森田	南之郷森田	平地	縄文			23
3	川内の一里塚	二之方川内中	平地	江戸	一里塚		68
4	野田後	二之方野田後	台地	縄文(早・後)	塞ノ神式		76
5	野田	二之方野田		縄・弥・平安			95
6	平季墓の墓	南之郷橋野	台地	平安	墓		58
7	橋野	南之郷橋野		弥生			139
8	橋野六地蔵	南之郷橋野	平地	江戸	地蔵		66
9	霧島段	二之方霧島段		縄文(晩)歴史	石鏃・叩石・土師器・青磁		96
10	宇都谷	南之郷宇都		古墳			127
11	広底	南之郷広底		縄文			128
12	下段	二之方下ノ段		縄文歴史	打製石斧・土師器・常滑焼		101
13	小中野下原	二之方小中野下原	台地	縄文(晩)			84
14	国合	二之方国合		縄文(晩)	黒川式		102
15	牧A	岩崎牧		弥生(中)	山ノ口式		103
16	牧B	岩崎牧		縄文			104
17	境田	岩崎字境田		縄文歴史	土師器・青磁		108
18	横上	南之郷	平地	弥生(前)	石斧・石鏃		44
19	三枝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	南之郷三枝3122-2	台地	縄文(前・中・後)	指宿式		19
20	中園	南之郷中園	畑地	縄文			18
21	鏡	南之郷	平地	弥生	石棒・石鏃・石包丁・ 靴型石器・石弾・打製石斧		45
22	石切谷	南之郷中園石切谷	平地	縄文(前)			12
23	中律瀬	南之郷富田上	山				74
24	草馬どん	岩崎字富田		縄文	石匙		112
25	早馬神社	南之郷富田	平地	縄文		神社	16
26	竹友原	岩崎字竹友原		弥生			110
27	竹友跡	南之郷	平地	室町		墓	60
28	竹有原	南之郷竹有原	平地	縄文			20
29	鶴野畑	岩崎字鶴野畑		縄文(早)歴史	撚紋・土師器		105
30	岩崎野久尾	岩崎野久尾		縄文(晩)			106
31	前原	岩崎字前原		縄文(晩)歴史	土師器		107
32	原村	南之郷原村	平地	弥生	磨製石斧・鉄刀		35
33	原村第Ⅰ・Ⅱ	南之郷原村	平地	縄文(前・後・晩)	前平式・晩期黒色磨研Ⅱ式		22
34	見帰	南之郷見郷	平地	弥生	打製大形石器・靴形石器・ 打製石斧・有肩石斧・耳つき石斧		41
35	西原	岩崎字西原		縄文(晩) 弥生(中)歴史	土師器・須恵器		109
36	まのせ	南之郷大路(まのせ)	平地	弥生	石斧(有肩石斧・磨製石斧) たたき石・石皿		34
37	大路	南之郷大路	平地	縄文(後)	指宿式・市来式		21
38	本堂	岩崎字本堂		古墳	土師器		111

第三章 層序

発掘調査区のほとんどが傾斜地であるために、すべて一様に堆積しているわけではなく、特にIX層以下は不安定である。D-2区北側断面の土層を基準とした。

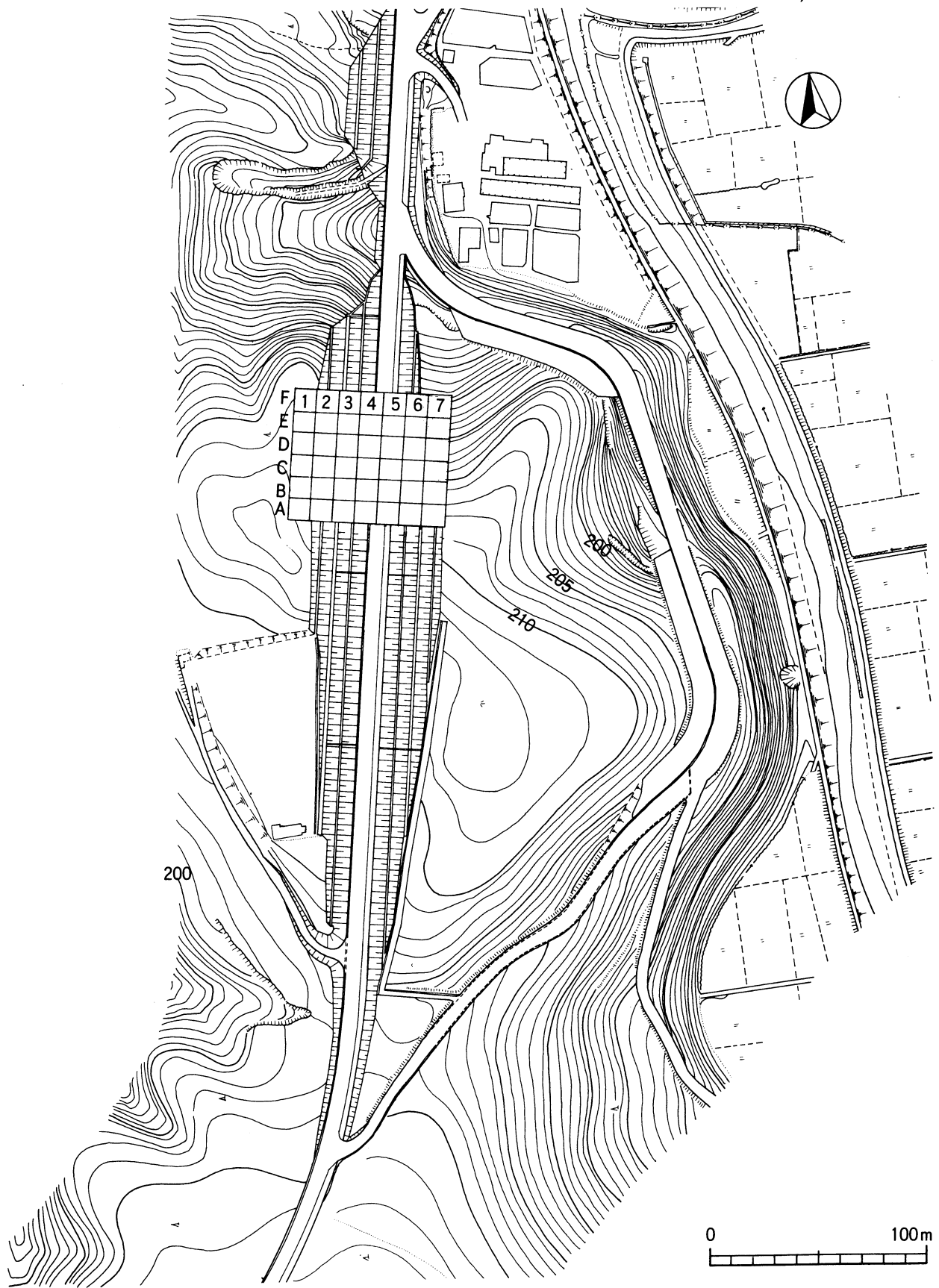


- I層 表層。
- II層 黒色土で黄白色軽石を含み、III層との境目には密になる。
- III層 黄白色軽石層。場所によっては形成されない。
- IV層 黒色土。遺物包含層。
- V層 暗褐色土。遺物包含層。
- VI層 黄褐色土でパミスが全体的に入る。霧島の御池火山灰である。
- VII層 明黄褐色土。アカホヤ火山灰層である。場所によっては2層に分層できる。下部に5mm程度の黄橙色軽石がブロック状に入る。VIIb層～アカホヤ1次堆積、VIIa層がアカホヤ2次堆積である。
- VIII層 青灰色土層に相当するが、色調は暗褐色に近い。1～5mm大の黄橙色軽石が混じる。
- IX層 乳白色土。遺物包含層。
- X層 茶褐色土。遺物包含層。
- XI層 黒褐色土。遺物包含層。
- XII層 明黄褐色土で桜島起源のサツマ火山灰層である。場所によってはXI層の下部にブロック状に入る。
- XIII層 暗褐色粘質土。俗に「チョコ」と呼ばれる層である。
- XIV層 乳白色土で、あまり粘質は強くない。
- XV層 暗褐色粘質土。
- XVI層 黄橙色土。拳大の軽石が混じる。
- XVII層 桃色シラス。
- XVIII層 白色シラス。

第3図 標準土層図



第5図 平松城跡工事着工前の地形図



第6図 グリッド配置図及び工事施工後の地形図

第Ⅳ章 平松城跡の調査

第1節 平松城の概要

県道二之方見帰線と県道飯野松山都城線とが交わるあたりを国合原という。この国合原ではかつて2度の合戦があつた地である。延元4年(1339)に島津氏と相良氏の戦いがあり、いま一度は天正元年(1573)の肝付氏と北郷氏との戦いである。

天正元年に肝付竹友は、大軍を率いて北郷領末吉を侵した。これに対して北郷時久はただちに兵を集め一斉に肝付軍を襲い、これを打ち破つた。この合戦の舞台となつたのが平松城であり国合原である。平松城はこの戦いの直前に北郷氏によつて築城され、北郷氏の肝付氏に対する城であつた。この戦いを機に肝付氏の勢力はしだいに衰退するが、これに伴い平松城の役割も終えることになる。

平松城の東側を北流する大淀川は城を廻り込むように北西へと蛇行する。このために南から続く台地は急傾斜をもつて水田へと落ち込み、西側には開析谷が深く入り込む。平松城もこのような自然の地形を最大限に利用した山城となつている。大淀川の北側から平松城を見るとまさしく独立丘陵である。平松城は別名「陣城」とも呼ばれるが、本格的な城跡とみるべき空堀や土塁等の遺構も多くある。

現存する子字名は、「陣ノ山」「東陣ノ山」「陣ノ下」「陣ノ前」「乙名陣」「弓場迫」「鬼弓場」等いずれも城に関係するものである。

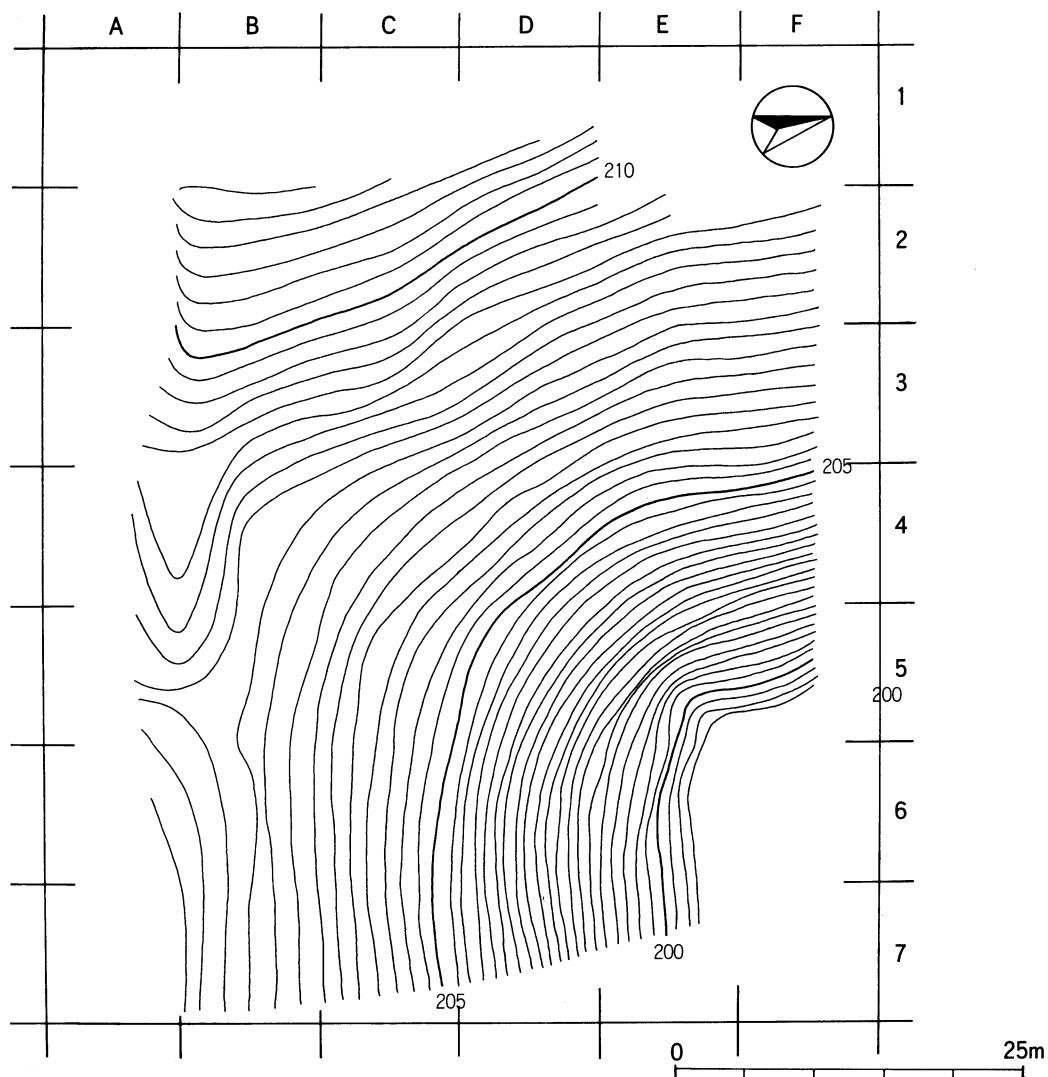
第2節 調査の概要

平松城は、曾於郡末吉町大字南之郷子字陣ノ山に位置する。第1章第1節でも述べたように県道工事中に発見された遺跡である。道路工事が平松城の一部を縦断して行われ、平松城に係わる距離約550mのうち発掘調査を開始する時点では距離にして約60m、面積約3,000m²を残すだけになっていた。しかも、重機で地下げを開始しており、Ⅲ層の黒色土層・Ⅳ層の暗褐色土層まで削平を受けている場所もあつた。

調査は、工事休止で積んであつた廃土の調査区外への持ち出しと、表層の剥ぎ取りを重機を使って慎重に行なつた。人力による掘り下げはⅢ層から行なつた。調査区の南北側とも工事が行なわれており、北側で20m以上、南側で10mの段差があつたため、安全上ある程度調査区境から控えて調査を行なつた。また、調査区の北東部分は急傾斜地でベルトコンベアーも設置できず、廃土を人力で上に運ぶのにも困難が伴い、安全上から下方に落とし廃土置場とした。10m枠のグリッド設定は工事用のセンター杭を基準にし、南から北へAからF区まで、西から東へ1から7区とした。

I～Ⅲ層からは遺構・遺物は検出されず、Ⅳ層からは土師器が出土し、調査区全体にはⅢ層が形成されていないことからⅣ層上面を中世山城面ととらえて検出を行なつた。清掃後、25cmコンタで地形を測量し、写真撮影を行なつた。平松城に関係する遺構・遺物は今回の調査区内からはいずれも検出されなかつた。

第7図は、中世山城面ととらえたⅣ層上面で測量した地形図である。野首部の台地が水田に落ち込む先端部であるため、調査区内の高低差だけでも12mある。



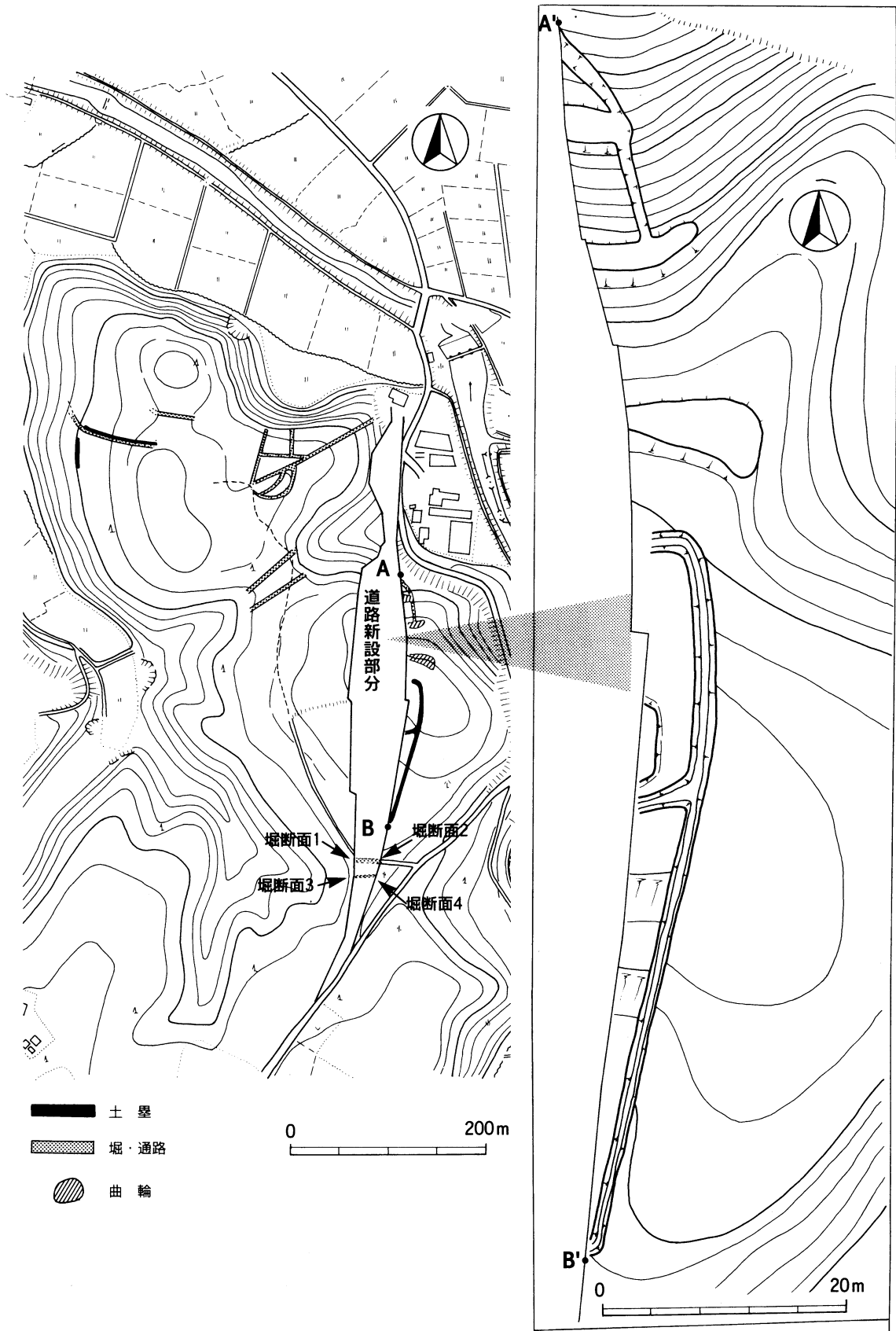
第7図 IV層上面地形図

第3節 遺構(第8図)

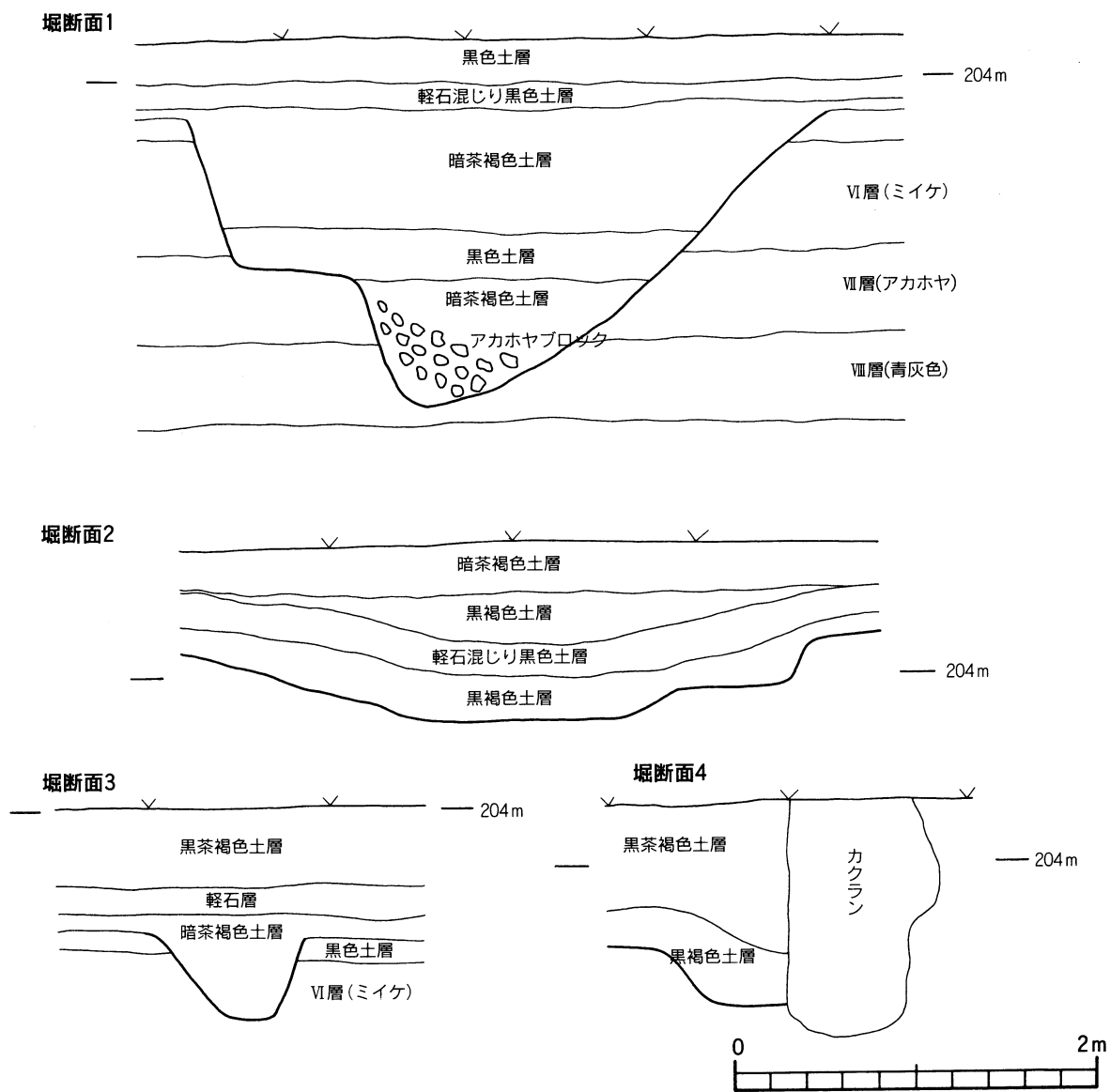
第8図は、遺構配置図と見取り図である。調査区の南東部にはそのほとんどを鶏舎建設と今回の道路工事で破壊された土塁の一部が残る。長軸をほぼ南北にとつた一辺約150mの長方形に土塁を築き、北寄りの三分の一に横断する土塁が延びることが想定される。土塁で囲まれた中には北側に第1郭と南側に第2郭が築かれている。土塁の幅は2～3mで、第1郭の北側では4mと広がっている。第1郭の内部は外側と比べ幾分低く、虎口らしい遺構も見られる。第2郭には平坦部を2ヶ所築き、曲輪として使用したことがうかがわれる。また、調査区の東側、第1郭の北側斜面には3つの帯曲輪も見られる。曲輪と曲輪を繋ぐ通路も残る。

また、調査区の北西側の山中には平松城に伴うものとみられる堀や土塁が多く残る。測量を行っていないので正確な位置及び大きさは示せないが、見取り図として掲載する。野首部には2本もしくは3本の堀がある。城の北東端部にも堀がめぐり、その堀に囲まれた曲輪が幾つか築かれている。また、城の北西部からの通路に添って土塁が築かれている。平松城跡に残る土塁は土を固めた様子がなく、ただ単に土を盛っただけのものである。この特徴は、都城地方の山城にほぼ共通するものである。^{注1)}

注1) 都城市教育委員会 梶畑光博氏より教示。



第8図 遺構配置図及び見取り図



第9図 堀断面図

第9図は、土塁の南端部から約40m、道路工事区南端で工事に伴う削平が行われた法面に見る堀切の断面である。1は幅3.5m深さ1.5mを測り、VIII層まで掘り込んだ薬研堀である。2は幅3.5m深さ0.5mのVII層まで掘り込まれた箱堀、3は幅0.8m深さ0.4mの薬研堀、4は攪乱によりその全体像はつかめないが、深さ0.3mを測る。これらの断面に残る遺構は、いずれもVI層面からの掘り込みが確認でき、埋土はIII層で黄白色の軽石を含まない。特に、3の断面の黒茶褐色土層と暗茶褐色土層の間には厚さ数cmの黄白色軽石の単純層が形成されている。遺構の時期については、平松城に伴うものと理解される。1と2の堀は連続すると思われるが、その形態が違うなど疑問も残る。また、3と4の堀についても4の形態が把握できないので断定はできないが、連続する可能性はある。

第V章 発掘調査

第1節 調査の概要

縄文時代後期から奈良・平安時代までの遺物は表面採集でき、また工事で削平を受けているIV層から出土することが確認できていたので、IV・V層は調査区全域を掘り下げた。IV・V層の遺物出土状況は、第10・11図に示した。V層からの出土遺物は、E-2区からC-5にかけての帯状に広がる。B-5・6区が調査区内では割りと平坦部であり、その平坦部から斜面になりはじめるC-4・5区に遺物の出土が集中した。遺構については確認されなかった。

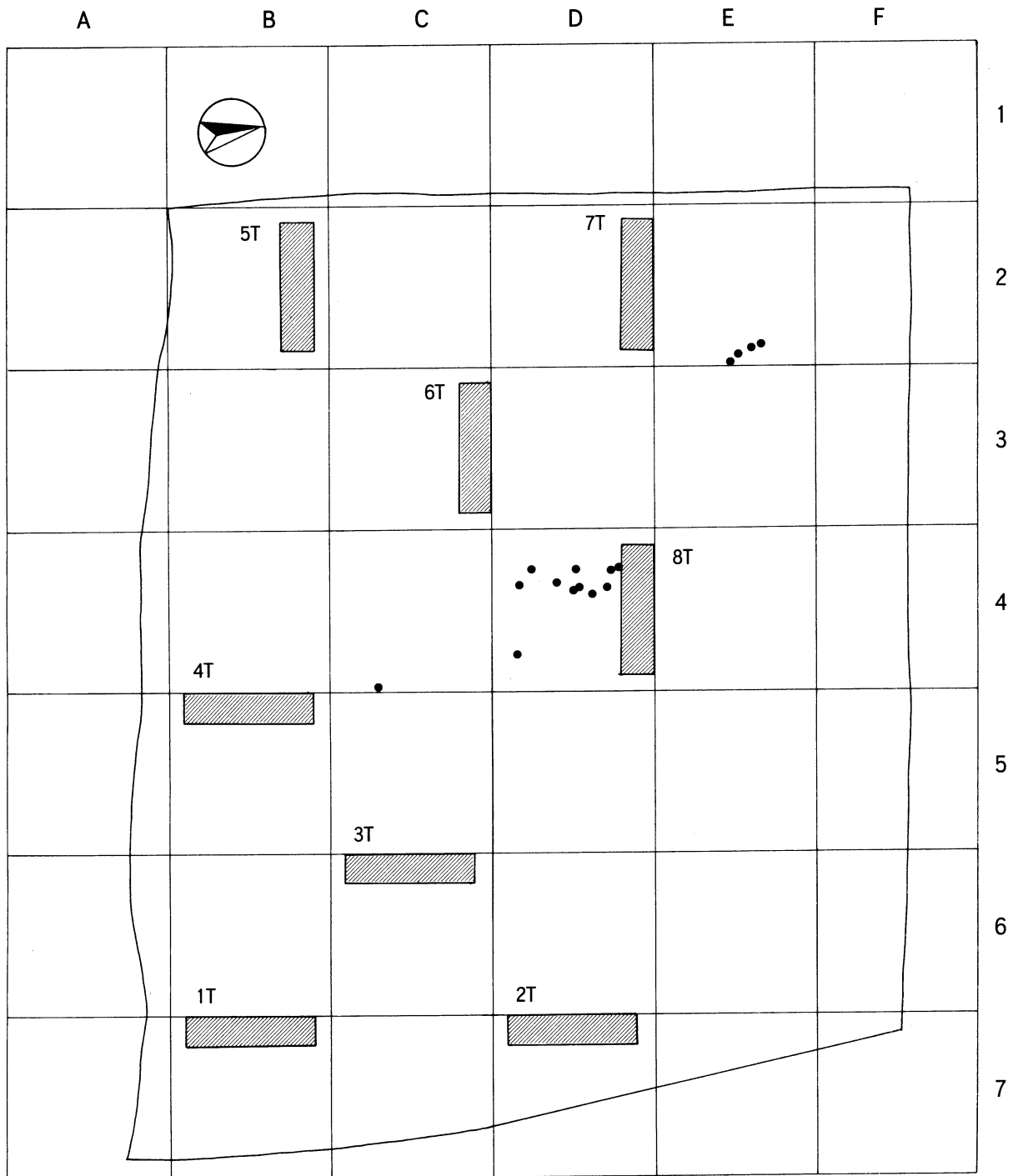
縄文時代早期の遺構・遺物を確認するために、平松城跡の調査を終了した後、設定したグリッドに添うように2×8mの確認トレンチを第10図のとおり8本入れた。その結果、7・8トレンチから縄文時代早期の遺物が出土した。トレンチ調査の結果をもとに縄文時代早期の遺物包含層についてはD・E-2・3・4区を中心とした約600m²を調査することになった。IV・V層の調査を終了した後、重機を使いVI・VII・VIII層の火山灰堆積層を除去し、IX層から人力による調査を再開した。IX・X・XI層の遺物出土状況は、第12図のとおりである。調査区が斜面地であるため、IX層以下の包含層の堆積も非常に不安定で場所によっては分層もできなかつたが、X層出土の遺物の数が多かつた。XII層上面の地形図は第13図に示したが、D・E区の境辺りに浅い谷が入り込む地形になっている。遺物の出土状況もD・E-2区から4区へと広がりC・F区への広がりはなかつた。

なお、各トレンチの土層堆積状況は以下のとおりであった。

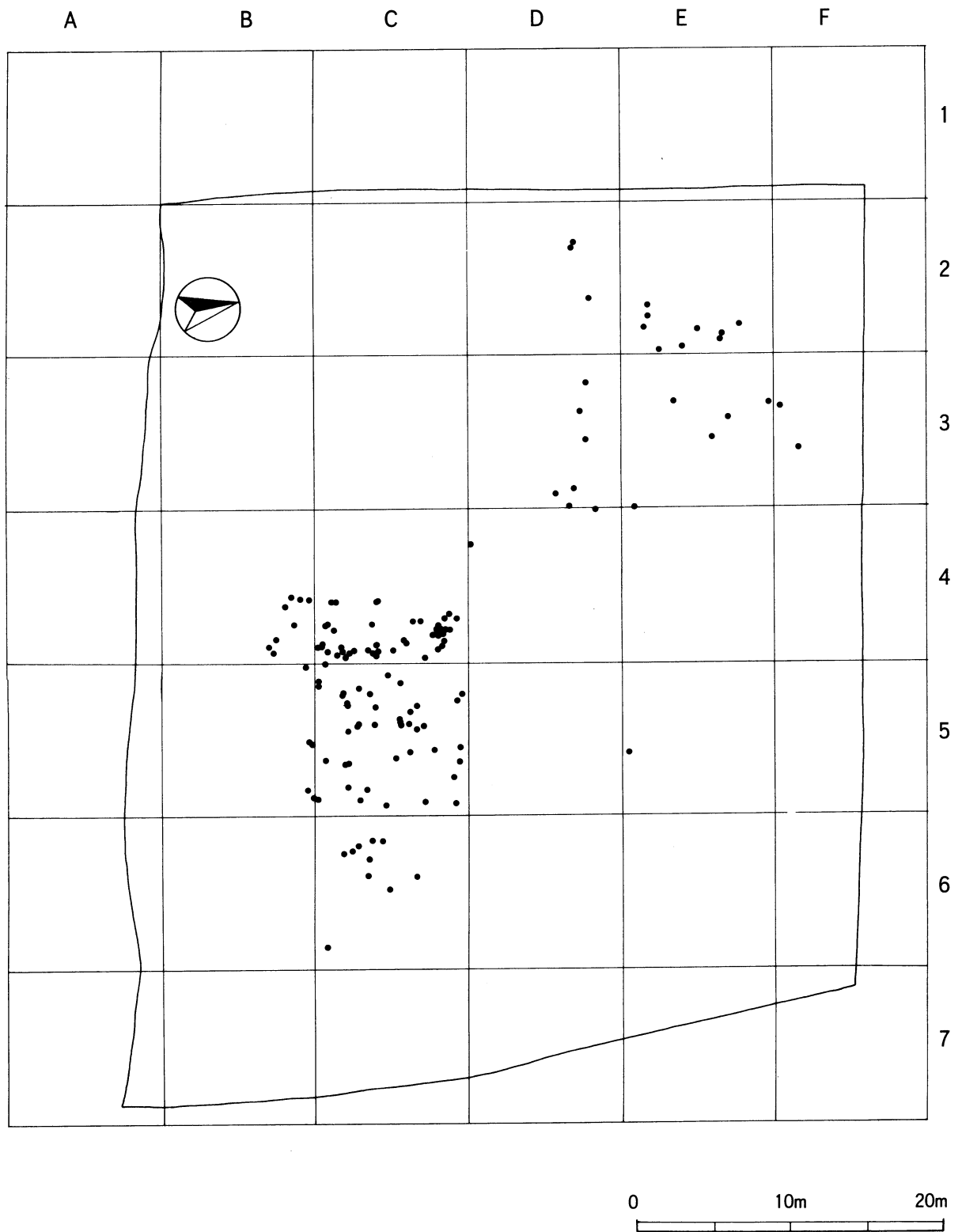
- 1トレンチ VIII層・XIII層の形成が悪い。XIII層はXIV層と混じっているため粘質が弱い。
- 2トレンチ 全体的に各層とも薄く、不安定である。特にVI層とVII層及びIX層以下の分層が難しい。
- 3トレンチ VIII層以下が不安定。XI層は、連続性がなくブロック状に堆積する。
- 4トレンチ VII層までは安定するが、VIII層以下は不安定。IX～XI層は、黄橙色あるいは明黄色のパミスが混じる。
- 5トレンチ XII層のサツマが不安定で、XI層とXIII層の色調が類似している。
- 6トレンチ IX層・X層の分層ができず、XI層の形成が悪い。
- 7トレンチ VII層のアカホヤ火山灰の1次堆積が顕著である。全体的に地層が安定している。
- 8トレンチ XII層のサツマ火山灰が、XIII層の上面の所々薄く堆積する。全体的には割りと地層が安定している。

第2節 遺構(第14図)

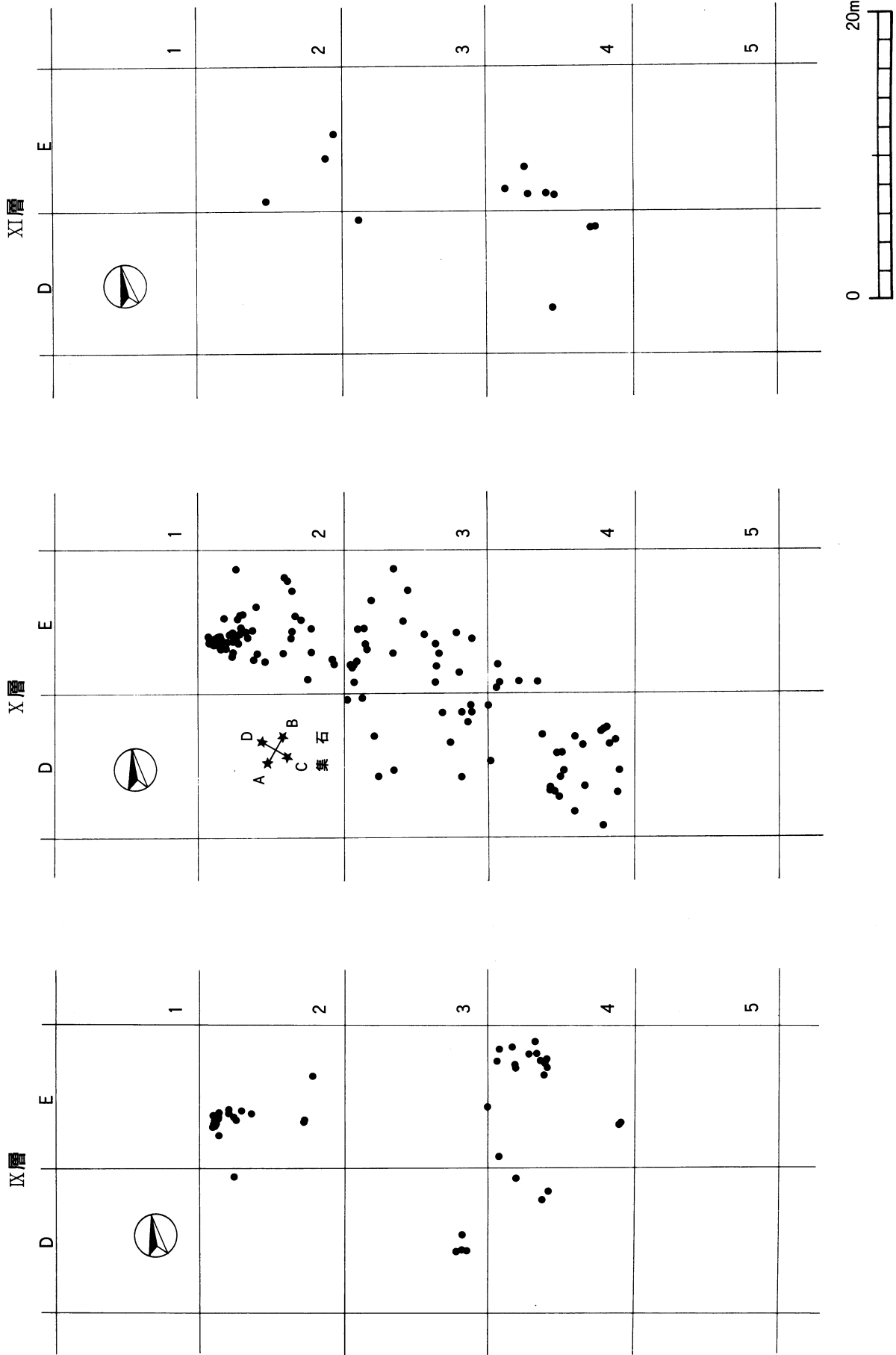
調査区北西斜面、D-2区から集石1基が検出された。(第12図) 100×80cmの範囲に総数39点の角礫を数え、周りに数点散在する。掘り込みは100×100cmのほぼ円形で、斜面を平にするために掘り込んである。X層からの掘り込みでXIII層まで達している。また、深さ5cmと9cmのピットが掘り込みの下面から2基検出された。掘り込みの下面から土器が1点出土した。第15図-14である。石坂式土器に伴う時期の集石と判断される。



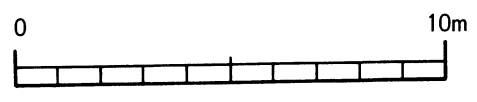
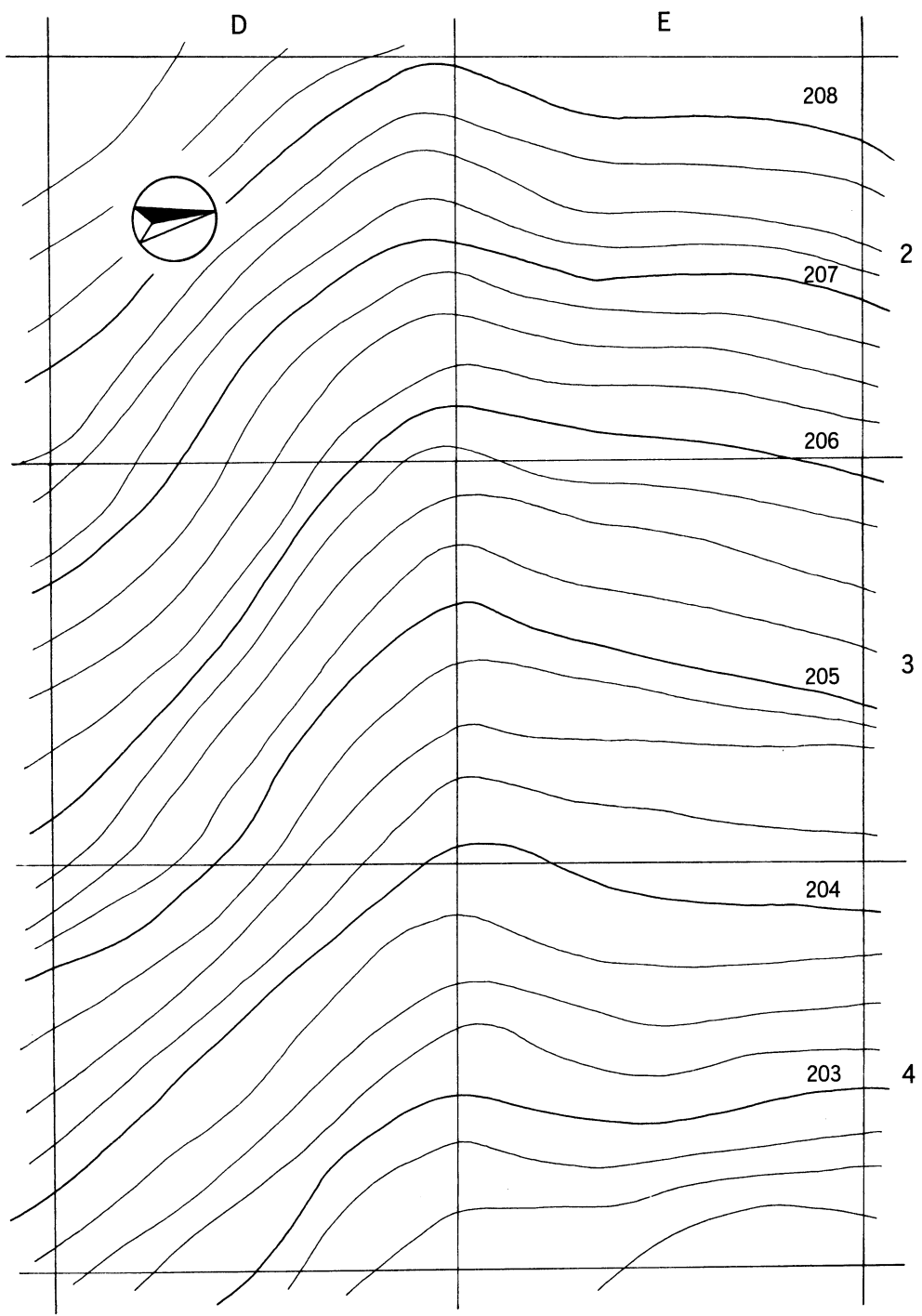
第10図 トレンチ配置図及びⅣ層遺物出土状況



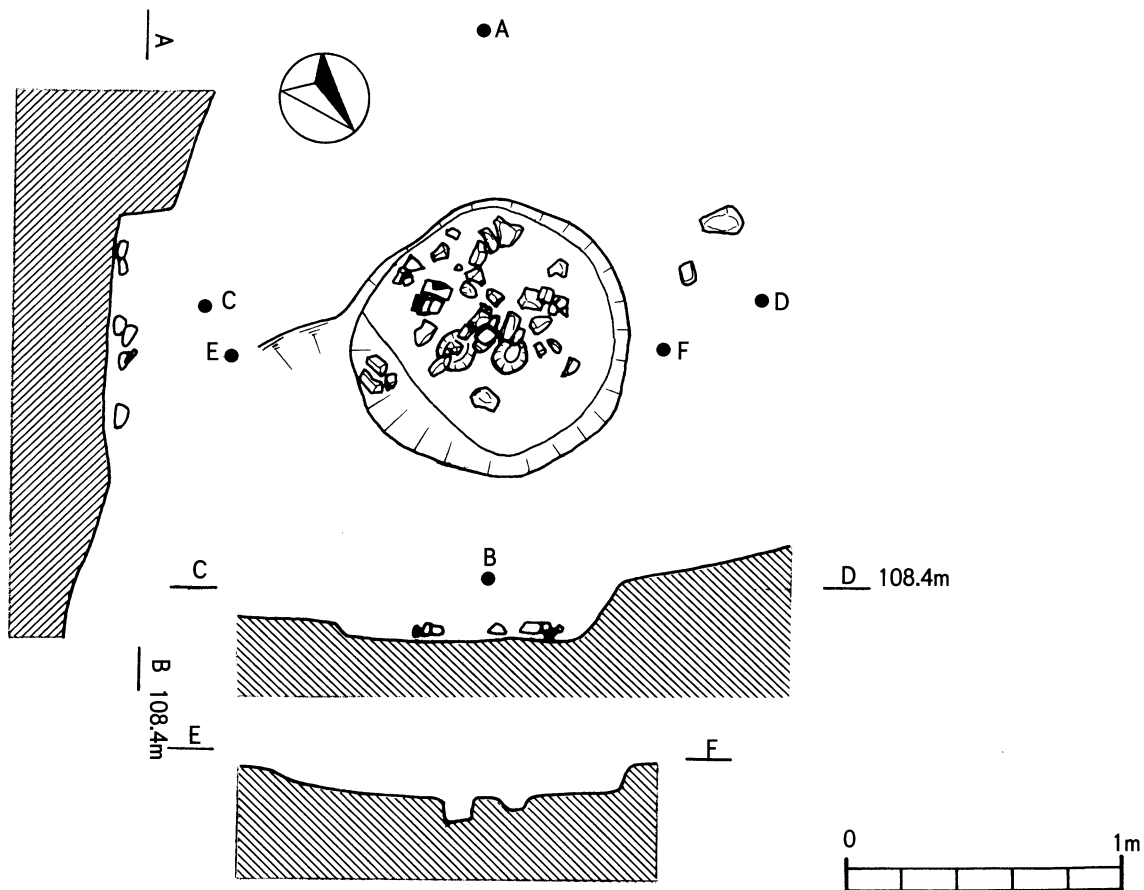
第11図 V層遺物出土状況



第12図 IX～XI層遺物出土状況



第13图 XII層上面地形图



第14図 集石

第3節 遺物(土器)

縄文時代早期(第15図・16図)

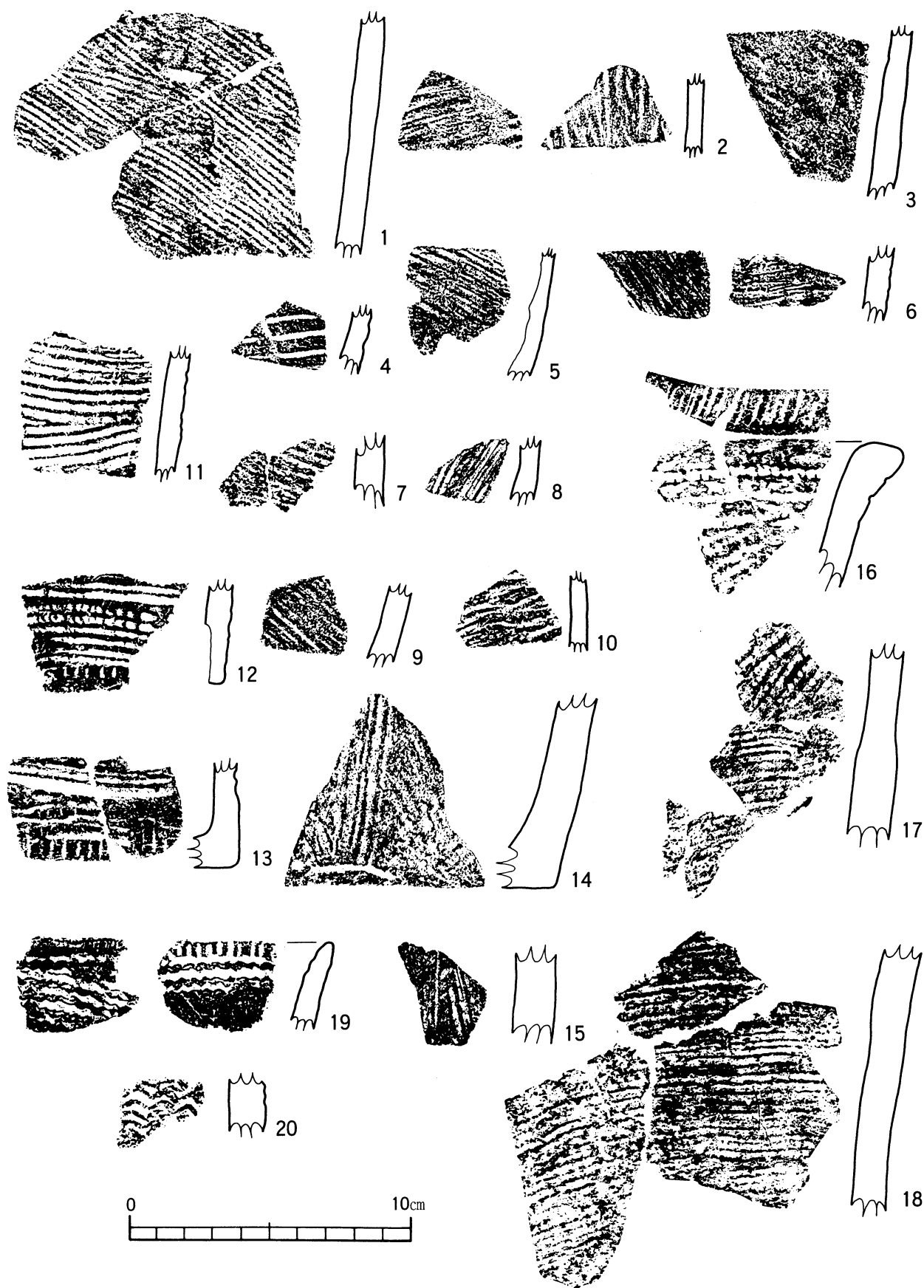
1～10は、前平式土器の範疇に含まれる土器である。外面には横位もしくは斜位の貝殻条痕を残し、内面はへら削り状の器面調整を行っている。6の内面調整は貝殻条痕で口縁部付近と思われる。

11～13は、吉田式土器である。11と12の外面は、貝殻条痕文と貝殻押引文とを交互に施している。11の内面調整は、ナデ状の仕上げで特にていねいである。12の内面は剝落しているが、13とともに底部でいずれも平底である。外面は底端部まで斜位もしくは横位の貝殻条痕を残し、末端部に縦位の刻みを施している。12は5mm程度、13は2cm程度の刻みである。

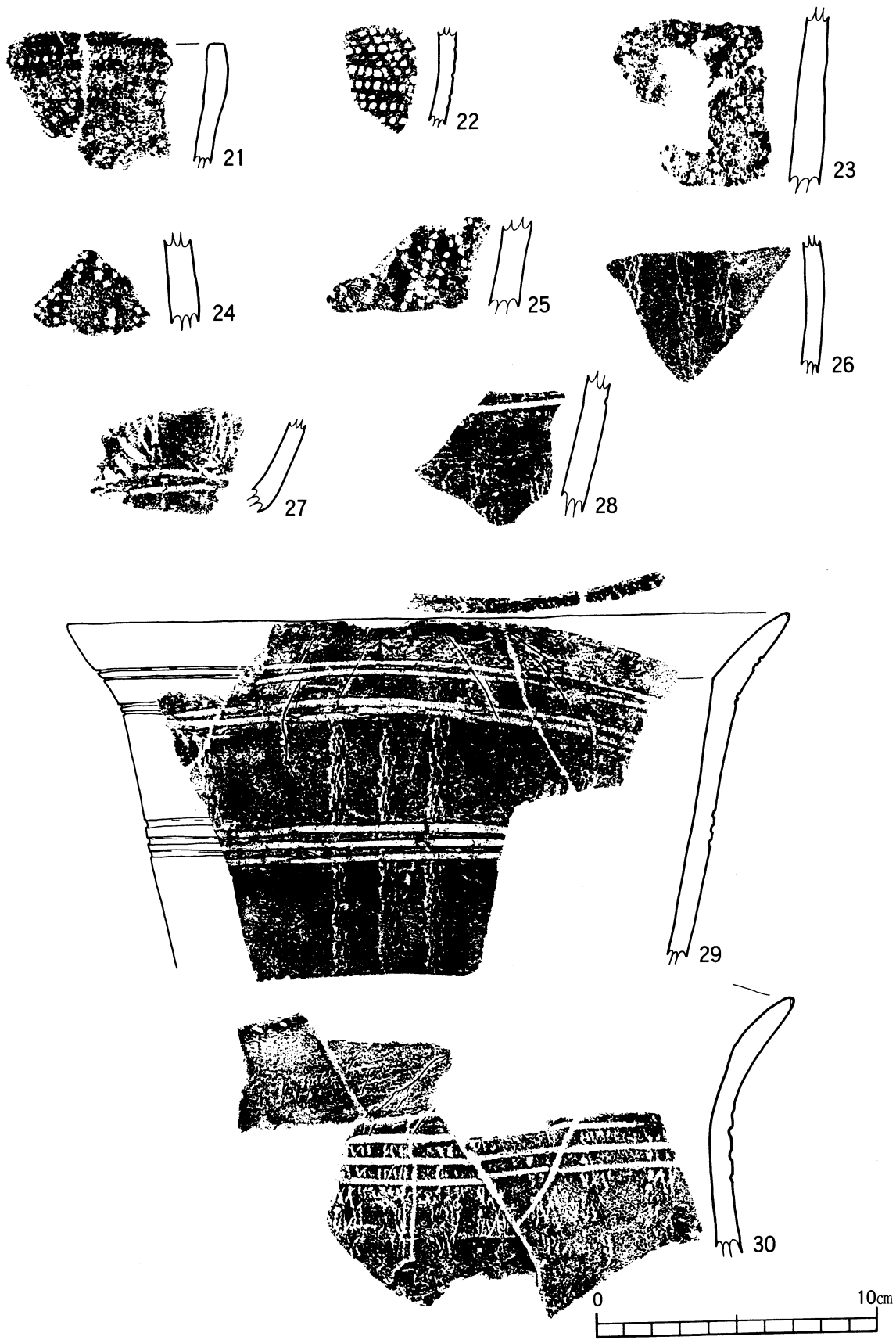
14～18は、石坂式土器である。14・15は共に器壁が1.5cmと厚く、外面に綾杉状の貝殻条痕文を残す。16・17・18は出土状況から同一個体と思われ、復元を試みたが接合できなかった。口縁部は外反し、横位と斜位の刺突をめぐらし、口唇部に刻みを施す。胴部には横位の貝殻条痕文を施し、底部は平底と思われる。14は、D-2区の集石内出土土器である。

19・20は、押し型文土器である。19は外面に山形押し型文を横位と斜位に施し、内面は口縁上部に縦位の刻み、その下に2条もしくは3条の山形押し型文を施している。薄手で焼成は堅固である。20は器壁が1.2mmと厚く、山形押し型文を施している。

21～25は石坂式土器系の下剝峰タイプと呼ばれ、器面全体に貝殻による綾杉状の刺突を施す土器である。21は口縁部が若干広がり、口縁端部を平坦にし、口縁上部に横位の刺突が3条、その下部に斜位の刺突が見られる。内面は、21～25ともナデによる調整が行われている。



第15图 出土土器(1)



第16图 出土土器(2)

26～30は、塞ノ神式土器でいずれも縦位の撚糸文がある。29は頸部から屈曲して口縁部が外反し、細まった口唇部の斜位の刻みが見られる。また、外面は頸部から縦位に間隔をおいて撚糸文が施文され、口縁下部に2条、頸部に2条、胴部に3条の浅い凹線をめぐらしている。内面の頸部においては明瞭な稜を持つ。30は内面に稜を持たずに波状と思われる口縁部が外反し、口唇部に斜位の刻みを持つ。

縄文時代後期(第17図)

31は、2本の平行沈線で文様を施し、内面はナデによる丁寧な調整である。指宿式土器に比定できよう。

32は、鋭角に張り出した底部外面に特徴を持ち、外面には指頭痕が多く残る。型式不明ではあるが、縄文時代中期末から後期にかけての土器であろう。

33～35は、西平式土器である。33・34は深鉢の胴部が大きく張り出す下部にあたると思われる。

35は若干上げ底気味の底部で、いずれの内外面とも研磨されている。

36は、凹線と刺突が施されている。深鉢の胴の上部分と思われる。37は、頸部分が外反し、断面三角形の口縁部分が内傾気味で2条の沈線文をめぐらすものである。調整は内外面ともナデである。36・37とも時期的には西平式土器に後続する時期に比定できよう。特に、36は、末吉町中岳遺跡の中岳1類(中岳1式)土器に比定することができる。

38～42は、三万田式から御領式にかけての土器である。38～40はいずれも口縁部で口縁外部に凹線を施す。41は、頸部と胴部との境部分で浅い凹線を施している。42は、頸部と胴部の境に段を持ち、頸部は内湾から外反して立ち上がり、口縁部は直行する。口縁部外面の文様帯に幅広い2条の凹線をめぐらし、内面にも1条の浅い凹線が走る。

43は、平底の浅鉢である。一見土師器と見間違ふが、出土層がV層で内外面とも研磨による調整が施されている。

縄文時代晩期(第18図)

46は黒川式土器の浅鉢の口縁部で、リボン状の突起部分である。内外面ともヘラによる研磨がなされている。45は口縁部で、46～48は同時期の深鉢の胴部であろう。49～52はいずれも器面が粗く、外面に条痕を残す。

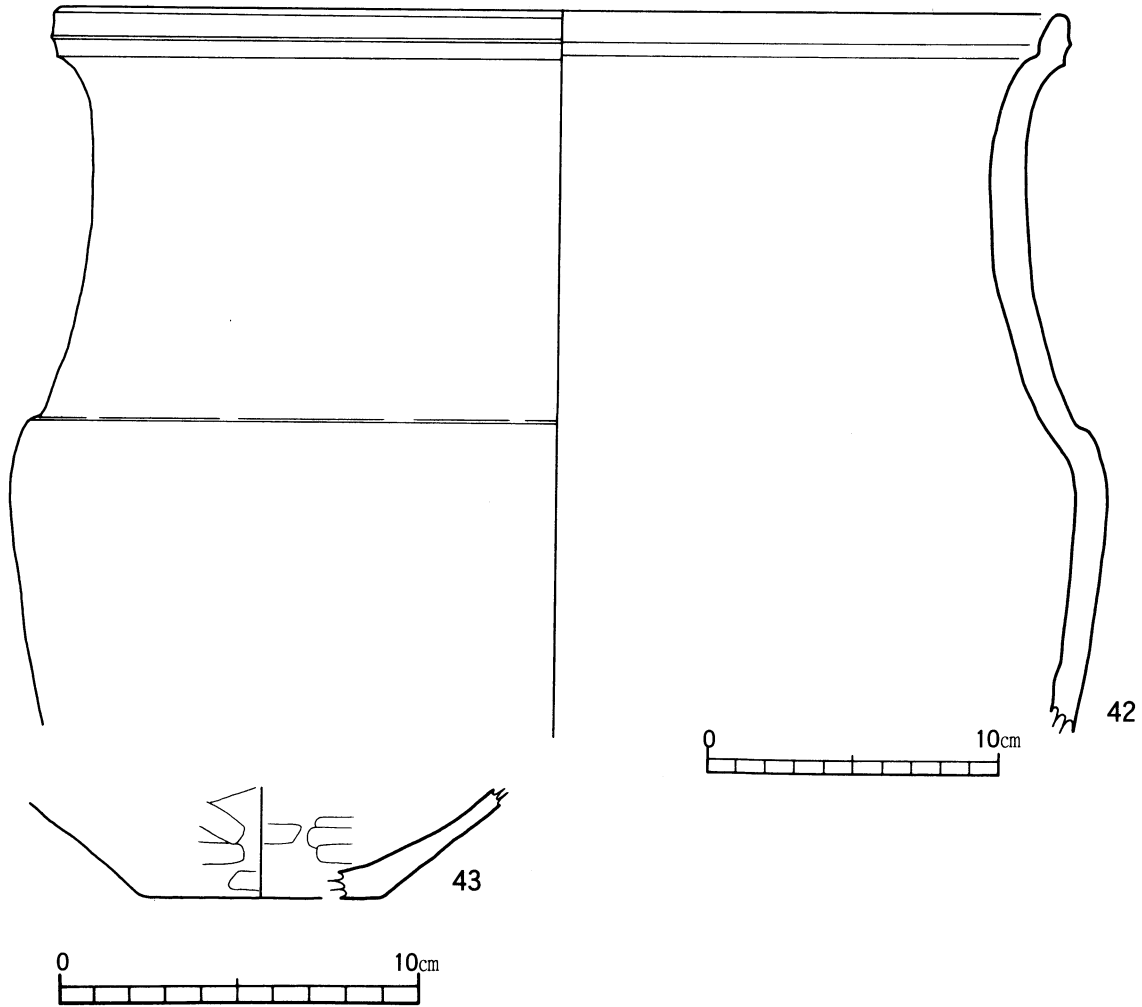
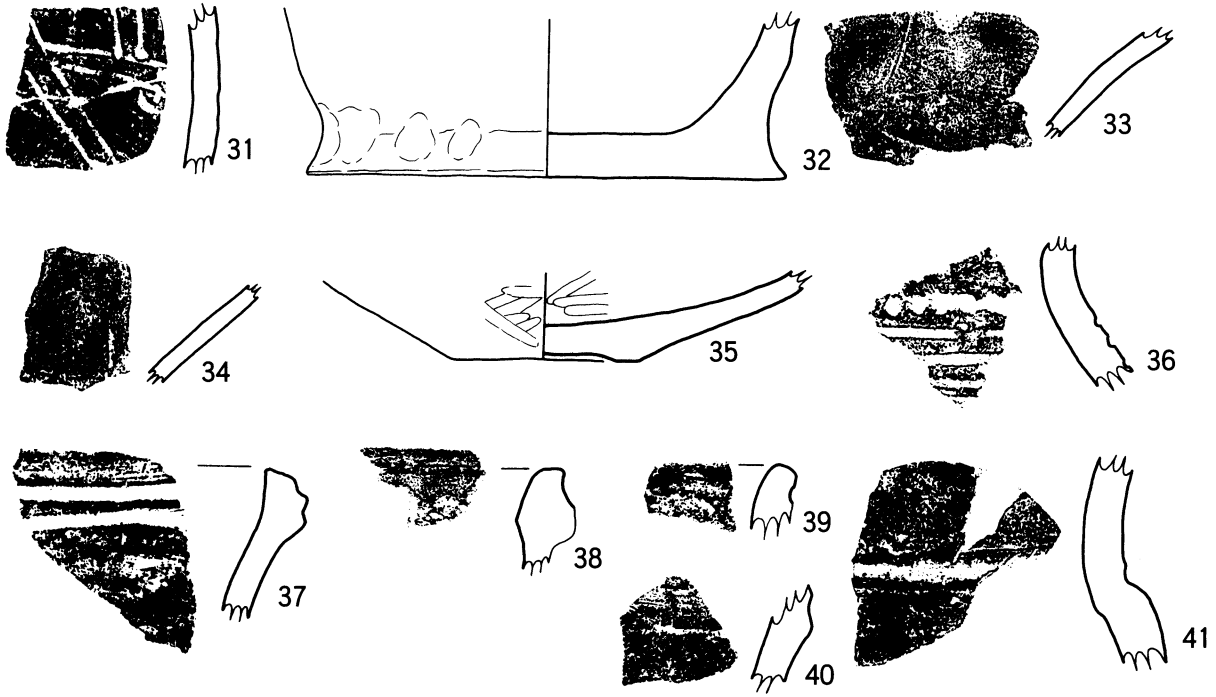
53～55は突帯文土器である。3点とも突帯の刻目は、指頭によるものである。

56・57は蓆目の圧痕文土器の底部で、蓆目以外の圧痕は出土していない。いずれの底部内面も、丁寧な研磨が施されている。

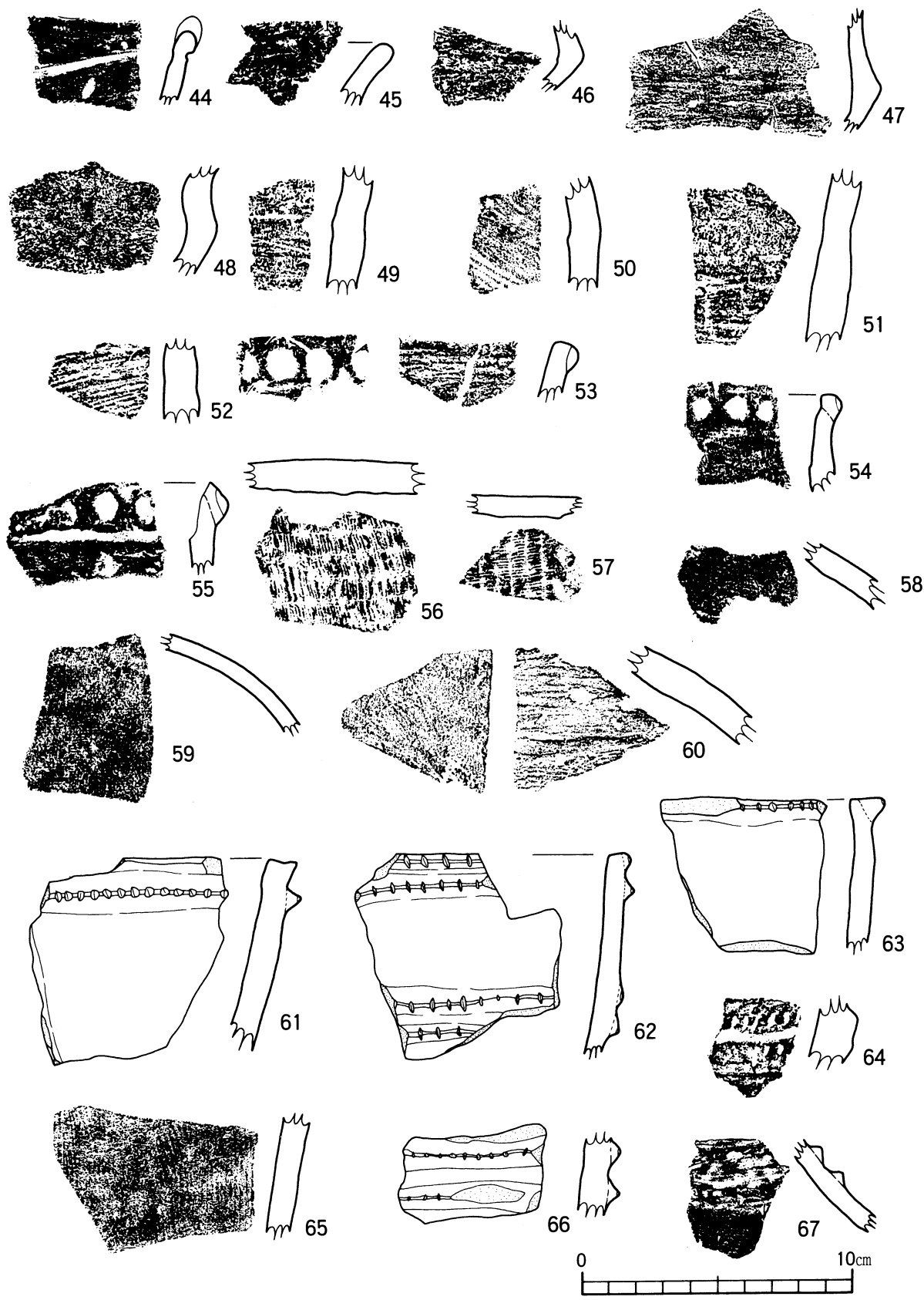
58～60はいずれも壺形土器の肩部で胎土が白っぽく、調整は58が内外面ともミガキで、58・59は外面がミガキで丹が塗られ、内面はヘラナデである。

弥生時代(第18図)

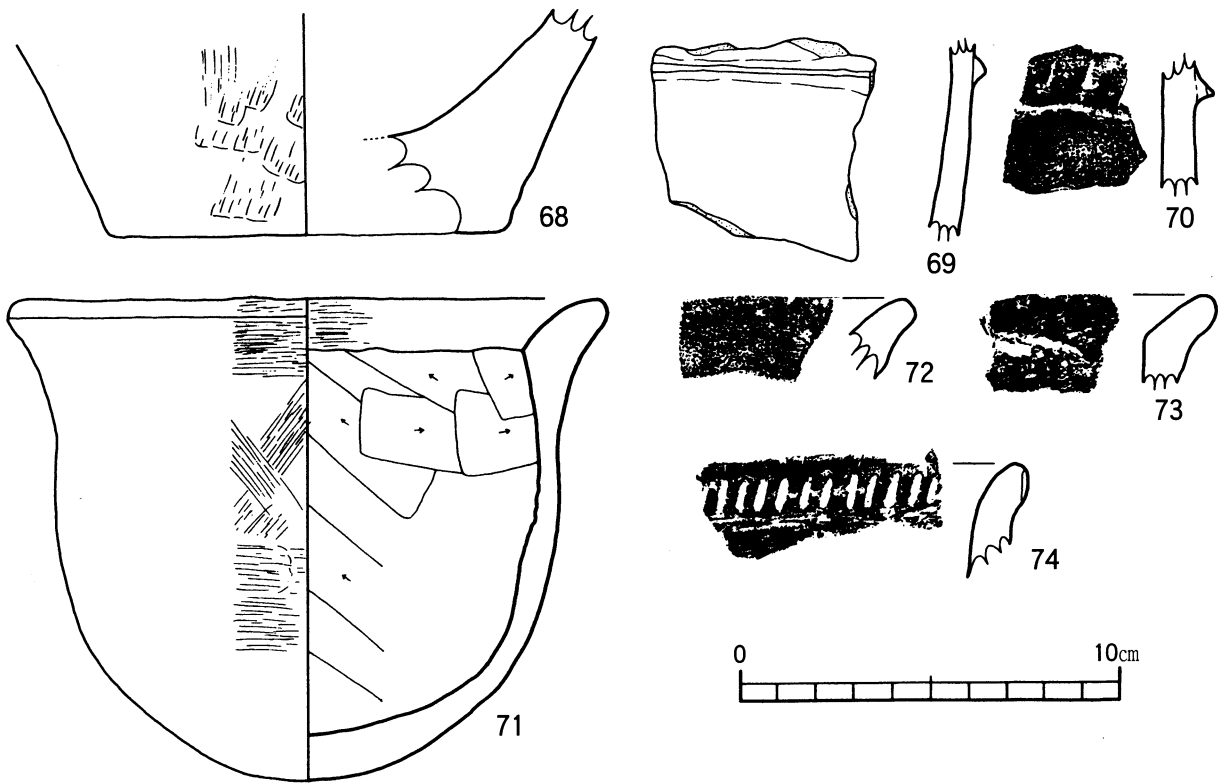
61～64・66は、甕形土器で弥生時代前期後半から中期にかけて位置付けられる土器である。63は口縁端部に突帯を貼り付け、刻みを施す。61は、口縁端部を摘み出して突帯を付け、その下には三角



第17图 出土土器(3)



第18图 出土土器(4)



第19図 出土土器(5)

突帯を貼り付け刻みを入れている。また、縦位に細い三角突帯を貼り付けている。62は、口縁部に2条、その下に間隔を置いて2条の張り付け突帯を持ち、それぞれに刻みが施されている。64・66はいずれも2条の突帯部分である。67は中期と思われる壺形土器の肩部で、2条の突帯を持つ。65は、器種は不明だが外面に刷毛目調整痕を残す。68は、平底の壺形土器である。外面は、刷毛ナデの調整を行っている。

古墳時代(第19図)

古墳時代の遺物で図化できたのは、69・70の2点であった。いずれも成川式土器の突帯部分である。断面三角形の突帯を貼り付け、70には刻みを入れている。

歴史時代(第19図)

71～73は甕形土器である。口縁部が外反し、口唇部を丸くおさめている。70は復元口径15.5cmを測り、外面はナデもしくは刷毛ナデ、内面上部はナデによる調整が行われ、胴部内面は斜位もしくは横位にケズリ上げられ、胴部と口縁部の境にはっきりした稜を持つ。平安時代前半の土器に比定できると思われる。

その他(第19図)

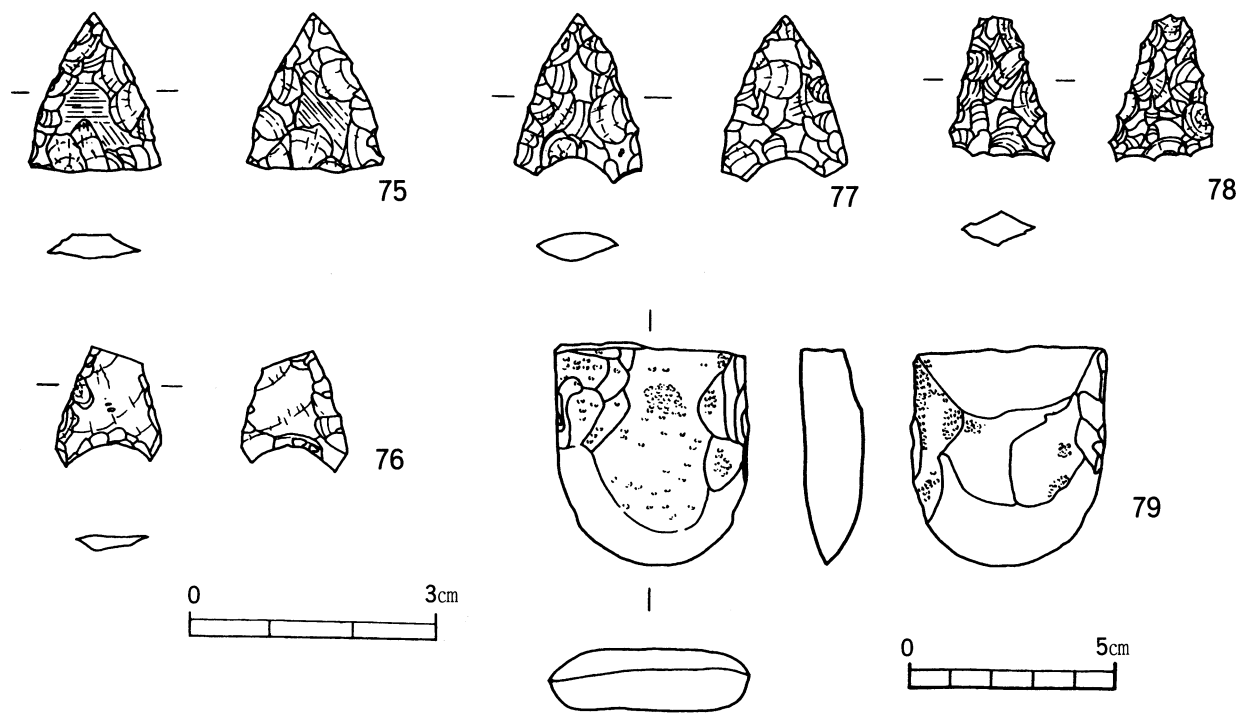
74は表採の土器で、若干肥厚する口縁端部に明瞭な斜位の刻みを持つ。焼成も良好である。時期については、不明である。

第2表 出土土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面	内面	備考
第 15 図	1	D-3	X	長石・石英・角閃石	良好	黄褐色・褐色	条痕	ナデ	
	2	E-4	X	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	条痕	条痕	
	3	D-4	X	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	条痕	ナデ	
	4	D-3	IX	長石・石英・角閃石	良好	黄褐色	条痕	ナデ	
	5	E-4	XI	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	条痕		内面剥落
	6	D-4	XI	長石・石英・角閃石	良好	黒褐色・茶褐色	条痕	条痕	
	7	E-4	XI	長石・石英	良好	淡褐色	条痕	ナデ	
	8	D-4	X	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	条痕	ナデ	
	9	D-4	X	長石・石英	良好	淡褐色	条痕	ナデ	
	10	E-2	X	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	条痕	ナデ	
	11	E-2	XI	長石・石英・角閃石	良好	黄茶褐色	条痕	研磨	
	12	D-3	VIII	長石・石英・角閃石	良好	赤褐色・黒褐色	条痕	ナデ	
	13	D-4	X	長石・石英	良好	赤褐色	条痕	ナデ	
	14	D-2	集石内	長石・石英・角閃石	良好	赤褐色・黒褐色	条痕	ナデ	
	15	E-4	X	長石・石英・角閃石	良好	黒褐色・赤褐色	条痕	ナデ	
	16	D-4	X	長石・石英・角閃石	不良	茶褐色	刺突	研磨	16・17・18同一個体
	17	D-4	X	長石・石英・角閃石	不良	赤褐色・茶褐色	刺突・条痕	ナデ	
	18	D-4	X	長石・石英・角閃石	不良	茶褐色	条痕	ナデ	
第 16 図	19	表採		長石・石英・角閃石・金雲母	良好	赤褐色・黒褐色	押型文	押型文・ナデ	
	20	D-2	IX	長石・石英・角閃石	不良	茶褐色	押型文	ナデ	
	21	E-3	X	長石・石英・金雲母・砂粒	不良	褐色・茶褐色	刺突	ナデ	
	22	E-3	IX	長石・石英・金雲母	良好	赤褐色・茶褐色	刺突	ナデ	
	23	E-2	X	長石・石英・金雲母・砂粒	不良	茶褐色	刺突	ナデ	
	24	E-3	X	長石・石英・金雲母・砂粒	やや不良	茶褐色	刺突	ナデ	
	25	D-4	X	長石・石英・金雲母・砂粒	良好	淡褐色	刺突	ナデ	
	26	E-4	IX	長石・石英・角閃石	良好	褐色	ナデ・燃糸文	ナデ	
	27	C-6	V	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	ナデ・燃糸文・沈線	ナデ	
	28	D-3	IX	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	ナデ・燃糸文・沈線	ナデ	
	29	D-3	IX	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	ナデ・燃糸文・沈線	ナデ	
	30	D-3	IX	長石・石英・角閃石	良好	赤褐色・黒茶褐	ナデ・燃糸文・沈線	ナデ	スス付着
第 17 図	31	E-4	V	長石・石英	良好	色	ナデ・沈線	ナデ	
	32	C-4	V	長石・石英	やや不良	茶褐色	ナデ	ナデ	
	33	D-3	V	長石・石英	良好	茶褐色	研磨	研磨	
	34	D-2	V	長石・石英	良好	茶褐色	研磨	研磨	
	35	C-6	V	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	研磨	粗い研磨	
	36	C-6	V	長石・石英	良好	赤褐色	研磨・沈線・刺突	ナデ	
	37	E-4	V	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	口縁部に沈線
	38	表採		長石・石英・角閃石	良好	褐色	ナデ	ナデ	口縁部に凹線

第3表 出土土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面	内面	備考
第17図	39	表採		長石・石英・角閃石	良好	褐色	ナテ	ナテ	口縁部に凹線
	40	D-2	V	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	ナテ	ナテ	口縁部に凹線
	41	C-4	V	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	ナテ	ナテ	
	42	D-3	IV	長石・石英・角閃石	良好	茶褐色	ナテ	ナテ	
	43	C-4	V	長石・石英	良好	淡褐色	研磨	研磨	
第18図	44	C-4	V	長石・石英	良好	赤褐色	研磨	研磨	
	45	C-5	V	長石・石英	良好	淡褐色	ナテ	ナテ	
	46	C-5	V	長石・石英・砂粒	良好	褐色	ナテ	ナテ	
	47	D-4	V	長石・石英・砂粒	良好	赤褐色	研磨	研磨	
	48	E-4	V	長石・石英・砂粒	良好	赤褐色	ナテ	ナテ	
	49	D-4	IV	長石・石英	良好	褐色	条痕	ナテ	
	50	C-5	V	長石・石英・角閃石	良好	淡褐色	条痕	ナテ	
	51	C-5	V	長石・石英・砂粒	良好	褐色	条痕	ナテ	
	52	E-2	V	長石・石英	良好	褐色	条痕	ナテ	
	53	C-5	V	長石・石英	やや良好	淡褐色	刻目突帯	条痕	
	54	C-5	V	長石・石英	やや良好	淡褐色	ナテ・刻目突帯	ナテ	
	55	C-5	V	長石・石英	やや良好	淡褐色	ナテ・刻目突帯	条痕	
	56	B-4	V	長石・石英・砂粒	良好	褐色	組織圧痕	研磨	
	57	E-3	V	長石・石英	良好	褐色	組織圧痕	研磨	
	58	C-5	V	長石・石英・砂粒	良好	黒茶褐色・褐色	ナテ・刷毛ナテ・刻目突帯	ナテ	スス付着
	59	E-2	V	長石・石英・砂粒	良好	茶褐色	ナテ・刷毛ナテ・刻目突帯	ナテ	
	60	E-2	V	長石・石英・角閃石・砂粒	やや良好	茶褐色	ナテ・刻目突帯	ナテ	
	61	表採		長石・石英・砂粒	やや良好	茶褐色	ナテ・刻目突帯	ナテ	
	62	表採		長石・石英・砂粒	良好	褐色	刷毛	ナテ	
	63	表採		長石・石英・砂粒	良好	褐色	ナテ・刻目突帯	ナテ	
64	表採		長石・石英	良好	赤褐色	ナテ	ナテ		
65	表採		長石・石英・角閃石・砂粒	良好	淡褐色	ナテ	ナテ		
66	C-5	V	長石・石英	良好	淡褐色	ナテ	ヘラナテ	丹塗り	
67	C-6	V	長石・石英	良好	淡褐色	ナテ	ナテ	丹塗り	
第19図	68	D-3	V	長石・石英・砂粒	良好	褐色	刷毛ナテ	ナテ	
	69	D-3	V	長石・石英	良好	暗茶褐色	ナテ	ナテ	
	70	表採		長石・石英・砂粒	良好	暗茶褐色	ヘラナテ	ナテ	
	71	E-2	IV・V	長石・石英	良好	赤褐色	ナテ	ヘラケズリ	
	72	E-2	V	長石・石英	良好	赤褐色	ナテ	ナテ	
	73	表採		長石・石英	良好	赤褐色	ナテ	ナテ・ヘラケズリ	
	74	表採		長石・石英	良好	褐色	条痕	条痕	口縁部に刻目



第20図 出土石器

第4節 遺物(石器)(第20図)

石鏃は、4点出土した。75は表採で、最大長1.9cm、最大幅1.7cmを計り、材質は玻璃質安山岩であろう。薄く仕上げられ、両面の一部に横位もしくは斜位の研磨が見られる。時期は縄文時代早期が考えられる。76も表採で、材質も玻璃質安山岩である。最大幅1.3cmを計り、先端部が欠損している。77は、V層出土である。形態的には凹基で抉りは浅く、最大長は1.9cmで最大幅は1.6cmである。石材はタンパク石で、材質はあまり良くない。78は、XI層出土である。先端部と基部一部が欠損し、石材は透明度の高い黒曜石である。黒曜石の産地を近くに求めるならば鹿児島熊本宮崎の県境の桑ノ木津留あたりであろう。

79は1点だけ出土した石斧で、基部が欠損している。石材は安山岩で、風化が進んでいる。両刃の局部磨製石斧で、調整のため敲打痕が残る。

第Ⅵ章 まとめ

平松城跡は、縄文時代から中世まで連続する遺跡である。縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代、奈良・平安時代の遺物が出土した。調査区内の標高差が12mと斜面であったために遺物の出土量はさほど多くはなかった。しかし、この地に各時代を通じて生活痕跡が残ることは確実であり、今回の調査区の南東部と北西部の平坦地には良好な遺跡が残存する可能性を示唆している。

縄文時代早期では、前平式、吉田式、石坂式土器等が出土した。包含層については、今回不安定な地層であったために層による分類はできなかった。集石が1基検出されたが、掘り込み内にさらに2つの小ピットを持つことに大きな特徴がある。類例がなく、今後の資料を待ちたい。

縄文時代後期では指宿式、西平式、三万田式土器等が出土した。また、西平式から三万田式への移行期の土器(第17図-36・37)や三万田式から御領式への変化をうかがわせる土器が出土した。第17図42の土器は口縁部に幅広い凹線をめぐらせるところは三万田式に近いが、羽状文はない。頸部と胴部の境に段条の界線を持つが、三万田式ほど胴の屈曲部が張らないという特徴を持つ。類例としては、高尾野町の中里遺跡がある。御領式に近い三万田式土器と思われる。

縄文晩期では黒川式の深鉢・浅鉢、圧痕文土器、突帯文土器が出土した。

平松城跡に関する調査は、狭い範囲で野首部の斜面地であったためにその全体像を明らかにすることはとうてい無理であった。また、不幸にして堀や土塁の一部が破壊されたことは事実だが、今回のことを警鐘として開発事業との両立を図りたいものである。堀や土塁の配置は可能な限り調査を行ったが、今後平松城の全体像を明らかにするための縄張り図作成が必要であり、このことが平松城跡の保護にもつながると思われる。

なお、三国名勝図会には「・・・天正元年、正月国合原合戦の時、北郷氏の臣永井刑部是を築といふ、刑部は、或は肝付氏臣とす、⁽¹⁾・・・」という記述がある。永井刑部がどちらの家臣だったかにより築城が北郷氏か肝付氏だったのか疑問が残るところである。そこで永井某の名を文書で拾ってみた。

「都城島津家所蔵文書」に「永井系図」があるが、これによると「天文4年・・・當此時也、永井利連・利良・利苗亦相遇其時變、而同年11月奔走莊内寶服北郷尾張守忠親・同息左衛門尉時久者也、」とあり天文4年(1534年)以後永井氏は北郷氏の家臣であったことがわかる。この永井氏と三国名勝図会にある永井刑部が結びつくかは疑問だが、北郷氏の家臣に永井氏がいたことは確かである。

反対に肝付家文書関係には永井某の名は今のところ見当たらない。「肝屬氏系圖文書寫」には天正元年の北郷氏と肝付氏との国合原合戦に関連して天正元年に肝付兼亮が三河入道竹友を使わしたが、末吉の合戦で首を斬られ、一族老臣死者430余りとも記載がある⁽³⁾。さらに、この戦いにおける死者の名簿中には肝付竹友以下惣以上151との記載があるが、⁽⁴⁾この中にも永井某の名はない。このようなことから永井刑部は北郷氏の家臣である可能性が強く、したがって築城も北郷氏によるものと思われる。

最後に、本遺跡のⅢ層(黄白色軽石層)について述べる。本遺跡から約2km西に野田後遺跡が在り、1984年に発掘調査が実施されている。報告書によると層序は本遺跡と基本的には同じで、Ⅰ層

が耕作土、Ⅱ層が黒色腐植火山灰層で最下部に白色軽石を含んで桜島の降下軽石としている。そして、Ⅲ層を黒色腐植火山灰層としている。また、末吉町内の上中段遺跡、小中野下原遺跡、仮牧遺跡、真方入口遺跡でも同じような層序で、真方入口遺跡の報告書では、Ⅱ層の降下軽石を桜島文明降下軽石としている。このように本遺跡の黄白色軽石層は、末吉町内に広く分布し、しかも同じ文明年間の桜島火山降下軽石の可能性が高く、従来そのように理解されてきた。

しかし、本遺跡の発掘調査結果と平松城の築城を照らし合わせると黄白色軽石の年代と平松城の築城年代について再考を要する。つまり、平松城の築城（天正元年・西暦1573年）後にⅢ層の黄白色軽石は堆積し、平松城に伴うと判断される堀断面の観察からも堀の埋没後に黄白色軽石が堆積している。本遺跡のⅢ層の黄白色軽石を文明年間（15世紀）の降下軽石とすると平松城築城との間に適合性を欠くことになる。文献にない平松城以前の城があったのか、黄白色軽石が文明年間より新しい降下軽石なのかは即断はできないが、今後検討を要する問題である。

参考・引用文献

-
- 中里遺跡 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(1) 1993
中岳洞穴 末吉町教育委員会 1980
野田後遺跡 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 末吉町教育委員会 1985
上中段遺跡 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 末吉町教育委員会 1986
土合原遺跡 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 末吉町教育委員会 1990
川原遺跡 東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 東郷町教育委員会 1990
古保山・古閑・天城 熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会 1980
(1)三国名勝図会（巻之36 末吉）南日本出版文化協会 1966
(2)都城島津家所蔵文書53 「永井系図」宮崎県史史料編中世Ⅰ 宮崎県 1990
(3)新編伴姓肝屬氏系譜366 「兼亮の項」鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ2 鹿児島県 1991
(4)肝屬氏系圖文書寫32 「末吉口討捕頸注文」鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ2 鹿児島県 1991
-

圖 版



平松城跡遠景



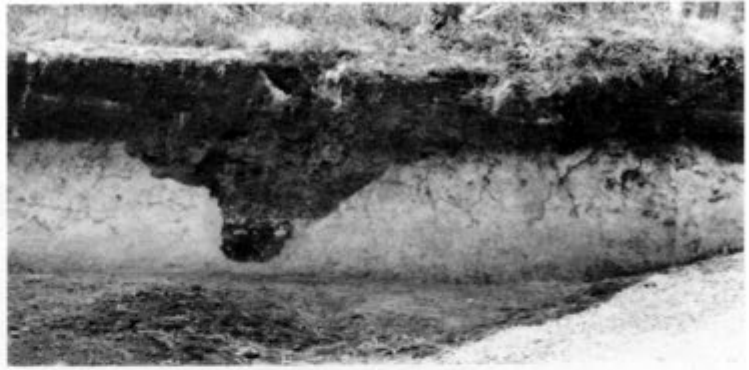
遺跡近景



作業風景

图版 2

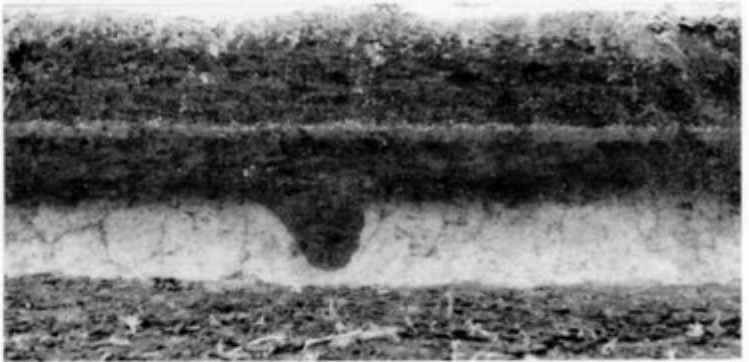
堰断面1



堰断面2



堰断面3



堰断面4





集石と土層断面



集石検出状況



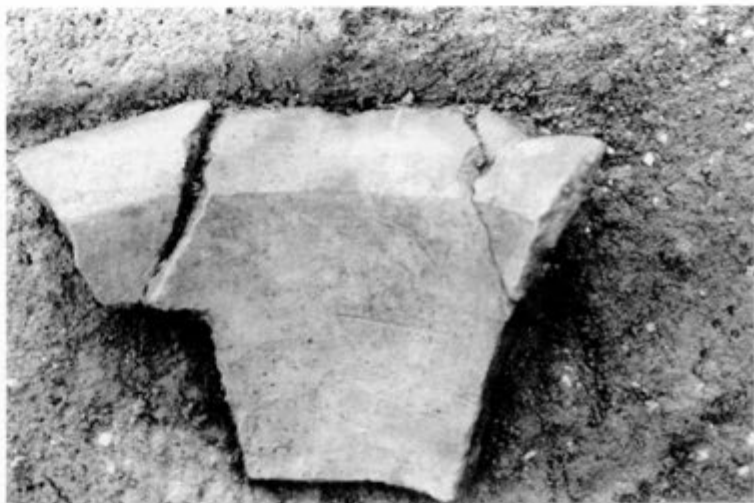
掘り込み検出状況

図版 4

D-4区V層遺物出土状況



遺物出土状況 (No.29)



遺物出土状況 (No.18)





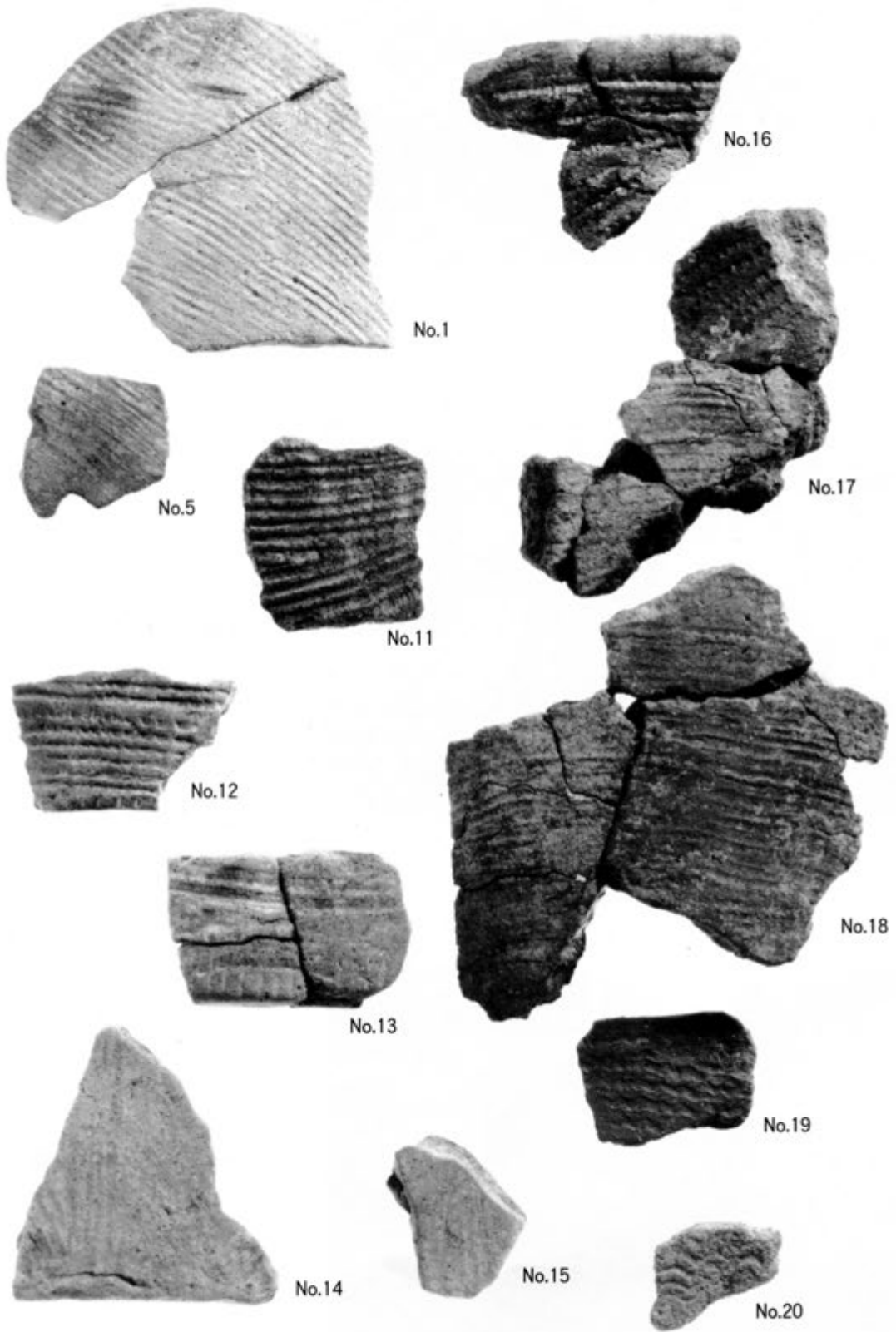
遺物出土状況 (No.32)

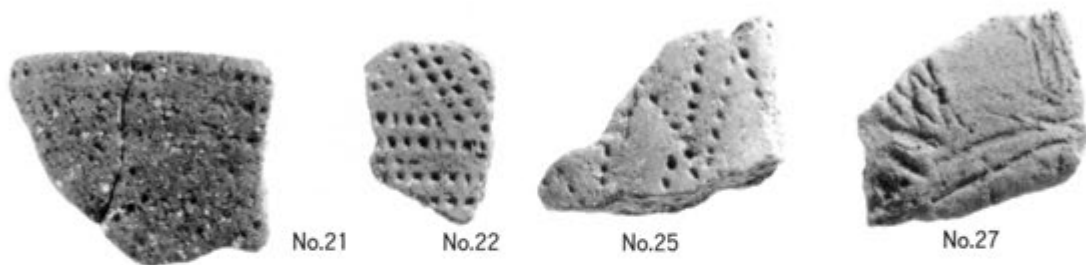


遺物出土状況 (No.63)



D-2区北側土層断面図







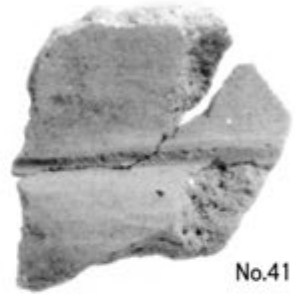
No.31



No.36



No.37



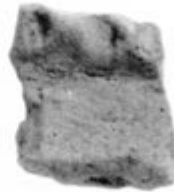
No.41



No.44



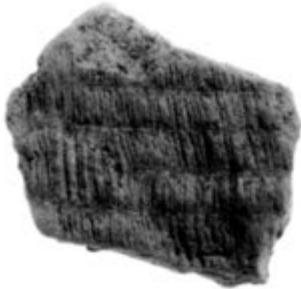
No.53



No.54



No.55



No.56



No.63



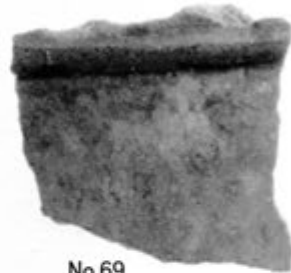
No.61



No.62



No.67



No.69



No.70



No.74



No.42



No.32



No.35



No.71



No.43



No.68



No.75



No.76



No.79



No.77



No.78

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(13)

平松城跡

1995年3月31日

- 発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252 番地
- 印刷 有限会社ピー・エス・エー・ピー
〒892 鹿児島市新屋敷町26-15